明治三十四年九月再版

詰難辨駁 正教談

正教會出版

兄弟乎爾宜自愼恐有以曲學空術誘爾者循人之遺傳循世之小學不循基督也（哥羅西書二章八節）致我儕不復爲嬰兒蕩漾而搖動諸教之風以人之詭計及試惑之術（以弗書四章十四節）

兄弟乎爾故宜堅立且固守爾所受教之遺傳或於言或於我儕之書（帖撒羅尼迦後書二章十五節）

帝國圖書館藏

特18
291

緒言

余が此小冊子は愛すべき諸子の爲に編述せり、願くは諸子余が爲に一讀の勞を惜む勿れ、若し諸子にして此書を讀むを厭ふの心あらば特に强ひて之を讀むべし、何となれば諸子が之を厭ふは業已に其必讀すべきを證するものなればなり。

語に曰く善き書籍は良き朋友なりと、余は諸子の爲に斯る良友を紹介せんことを欲す、故に請ふ諸子は余が衷情より諸子に紹介する所の良友を歡迎せられんことを。

余は此書に於て三種の妄誕を辨駁したり、即ち第一種の妄誕は不信より生じて最も有害なるものなり、故に余は第一着に之を駁したり。第二種の妄誕は無智より起り、第三種の妄誕は薄弱より出でたるものなり。而して諸子若し右に述る三種の妄誕を已に有せざらんには、此書は諸

子が妄誕に陷るの豫防とならん。余は萬般の場合に於て此書が諸子に幸福を與ふることを神に祈禱して止まざるなり。

余は自家の經驗に由りて眞正の幸福は神を信じ、神を愛するに在るを確認せり。故に諸子も亦此幸福に與るものとならんことを希望して止まざるなり。

諸子或は言はん、余が此書中に於て重大なる問題を論辨したるは甚だ簡短に過ぎたりと。然れども諸子よ、余が斯く簡短を主としたるは諸子の倦厭を恐れてなり、凡そ如何なる良書と雖ども讀者をして倦厭せしむるものは其書の大なる缺點なりとす。

終に臨みて余は諸子に願ふ、諸子は此書中の字句文章にのみ意を注がずして專ら眞理の存する所を講究せられんことを。殊に余は諸子に對して諸子が公平無私の心を懷きて此書を讀み、心を開きて眞理の感應を容るゝに躊躇せざらんことを請ふ。

編者識

○詰難之目次

第壹　余は宗教を聞くことも猶之を厭ふ……一頁
第二　不信者は常に神なしと主張す……三頁
第三　三寸息絶ゆれば萬事皆休す、人の死は百般の終極なり……八頁
第四　現世界の事々物々は皆偶然に因りて生じたるものにして決して神の攝理する所のものに非ず。何となれば此世界に不規律の存し、罪惡の存するは既に其明確なる證跡に非ずや……一六頁
第五　宗教家は徒に來世の福樂を說かんよりは寧ろ現世の社會を改善し、諸の貧苦災害を掃攘するを謀るべきにあらずや……二五頁

第六　宗教は唯愚夫愚婦の奉ずべきものにして智者學者の奉ずべきものに非ず。……三五頁
第七　人は篤實なる品行を有するを以て足れりとす、是れ即ち其者の爲に善美なる宗教にして此上更に要すべきもの有らざるなり。……三八頁
第八　世上には智者學者にして多く基督教を信ぜざるものあり。……四六頁
第九　余は人智を以て理解し得べき所のものは之を信ずれども、不可思議なる宗教上の諸説の如きは之を信ずること能はざるなり。……五二頁
第十　余は平素宗教を信ぜんとして渇望するものなり、去れど如何せん其之を信ずること能はざるを。……五八頁

第十一　宗教は唯基督教のみ善なるに非ずして總て皆善なり。六三頁
第十二　基督は宜しく之を大聖人となすべし、去るを之を神視するが如きは豈に愚の至りならずや。……七四頁
第十三　余は福音書の教誨のみを遵守して純粋なる初代の基督教を奉ぜんとす。……八四頁
第十四　余は余が自身の宗教を奉ぜんことを欲す。蓋余は神に服從するも人に服從するを欲せざるなり、去れば如何ぞ教會及び教會の誡命に服從するを要せんや。……八八頁
第十五　眞正なる基督教は既に人爲を以て甚だ損傷せられたり、故に余は損傷を被らざる純全なる基督教を奉ぜんとす。……九八頁
第十六　基督教の各宗派は皆大同小異なるものにして此中に眞正なる基督教會を發見するを得ず。……一〇一頁

第十七　余は奇蹟を信ぜざるものなり……一〇七頁
第十八　神は吾人の衷情をも洞察するものなれば我等は神に對して祈禱するの必要なし……一一〇頁
第十九　神は人に惡を行ふを聽して終に之を地獄の永苦に定むるものたらば甚だ殘忍と云ふべきなり……一一三頁
第二十　余は宗教を奉ずるが爲に世人の嘲笑を被むるを欲せざるなり……一一七頁
第廿一　余は屢視る基督教を奉ずる者の品行は反りて普通人の品行に比して劣れるあるを……一二〇頁
第廿二　凡そ宗教を奉ずる者の生活より不愉快なる生活は非ず何となれば若し宗教の命ずる所に從はゞ全身全財を擲ち小心翼々として諸般の事物に接せざる可からず斯る生活は現社會に生を營む者の決して遵守する能はざる所なり……一二二頁
第廿三　人青年の時期には須らく快樂を盡すべし……一二六頁
第廿四　余は老年に達し既に世俗の業務を辭したる時に至りて宗教を奉ずべし……一二七頁
結談……一三〇頁

詰難辨駁 正教談

露國 コラプレフ編纂
十堂 松本高太郎譯補

第壹

詰難 余は宗教を聞くことも猶之を厭ふ。

辨駁 何故に子は宗教を聞くとも猶欲せざるか、夫れ宗教とは神を識り、神を愛し、又神に奉事するものに非ずや。宗教とは善の何たるを識得し、又善事を鍛錬する所のものに非ずや。果して然らば子等決して宗教を斯く迄に嫌悪すべき所以なきに非ずや。故に宜しく余が今説く所を信ずべし。余察するに子は未だ宗教の何たるを知らざるものなるべし、否らざれば子は宗教を誤解して之を嫌悪するなるらん。去

希臘の哲學者プルタルフ曰く人若し世界を周歴せば或は墻壁なく或は文字なく或は君主なく或は金錢なき都邑に到ることあらん然れども未だ嘗て神なく神殿なく

或は祈禱なき都邑を設し者あらず

ローレンツ曰く永生を望まざる者は現世に在て既に死者なり

ラハテル曰く神と未來を信ぜざる者は此信仰を有する者の如く恭敬勇氣なること能はず

リトルド曰く宗教は人類間に靈神の生活を生ぜし母胎なり凡そ高尚の開明は宗教の令嬢なり

ジョンソン曰く上帝を敬信し我が身を恭敬するは凡百の德行凡百の事業の根原なり

れど眞正の宗教とは決して世俗の徒に妄想するが如きものに非ず、故に余聊か子に之を説明せん。

夫れ宗教は子に關係なきものには非ず、宗教は子の爲に存し、而して子は宗教の爲に存するものなり。如何となれば、宗教は子の智識を眞理に導き、子の心に安和を感ぜしむる所のものなり。又宗教は子をして子の何者たる及び子が何處より來り、又何處に去るを明かに教示するものなればなり。故に若し宗教なかりせば子は徒に死亡せる極めて不幸なる存在物に過ぎざるなり。

余が子に對して陳ぶる所の宗教は曾て其教會の内に大ワシリイ神學者グリゴリイ・金口イオアンの如き諸聖師父を出したる宗教なり。無數の殉教者と神に於る愛の爲に一身

を犧牲に供したる諸の大聖者を出したる宗教なり。

嗟呼子よ、若し子は神より出でたる此宗教が常に落魄者の悲涙を止め、不潔なる心情を清潔ならしめ、社會に蔑視せられたる罪人をして義人の列に轉移せしめたる實例を見、又此宗教が如何にして其眞理・溫和・希望・平安及び潔淨を各人の心裡に傳播するやを見ば、子は必ず自己の見解を一變し、終には余に請ふて云はん『願くば常に其宗教を余に說き、其眞理の光を以て余が智慧を照し、其聖なる感化力を以て余が心を淨め、其救贖上の慰言を以て余が憂愁を消せよ』と。故に子よ余が少頃く子の爲に此天啓の宗教を說くを許せ。

○第二

詰難　不信者は常に神なしと主張す。

波斯國の語に曰く神は爾が已よ近きよりも爾に近きものなり

ベーコン曰く淺近の理學は人をして神より離れしむることあるも彌〻之を學べば彌〻神に近接せしむるものなり

カント曰く穹蒼の日月星辰と胸中の道德法との二者は人の心を感格ならしむ

辨駁　去れど彼等は曰に神なしと唱ふるも衷心より斯く之を認むるものなるか。若し彼等の唱ふるが如く實に神なしとせば、此天地人類及び全世界の森羅萬象は抑も誰が創造に係るものぞ。總て是等萬物は自然にして生じたるものとなすべきか。人若し子に一の建築物を指して是れ自然に生じたるものなりと云はゞ、子は之に對して果して如何なる答辭をなすか。若し彼の人にして益〻之を主張せば子は又之に對して如何なる答辭を爲すか。斯る時には子は必ず獨り心中に思はん、彼の人狂するに非ざれば戲るゝのみと。夫れ斯くの如く一の建築物と雖ども自然に生ずるの理なくんば、況や全地を塡塞する至奇至妙なるの萬物に於てをや。豈造主なしと謂ふを得んや。

アウグスチン曰く肉體は靈魂と離るゝの日に於て死するが如く靈魂も亦神と離るゝに由て死す

又子は徒に神なしと言へども子は神なしと云ふことを誰より聞き知りたるや。必竟ずるに子は神を見しことなきが故に神は無き者なりと思惟したるならん。然れども吾人が目に見るを得、耳に聞くを得、手足に觸るゝを得る所のもののみ存在して、五管に感觸せざる所のものは一切存在せずと云ふを得べきか。例之ば吾人の靈魂は耳目手足の觸覺すべきものに非ず、去れど只此一事を以て人の靈魂は存在せざるものなりと云ふを得べきか。人の靈魂の實に存在するものたるや固より明白なる事實にして子も亦之を確信し、如何なる詭辨家の出でゝ子をして之を疑惑せしめんとするも恐くは子の信用をして消散せしむること能はざるべし。斯く靈魂は目に見えず、耳に聞えず、手足に觸れずと雖ども人

ゲヨセフ クツク曰く不信の原因は其人の學問の淺陋なるに在り

其存在を疑はざるなり。去れば子が目に見ざるを以て神は存在せずとなすは亦大に根據なき言に非ずや。

且つ夫れ神は靈なり。即ち吾人が其肉體を以て感觸すべからざるものにして、只其心を以てのみ識認すべき所のものなり。何となれば吾等の靈魂は同じく靈にして而して神は之を己の像と肖とに依りて造り賜ひしものなればなり。此の如く吾人は己の内に神に肖たるの特性を有するを以て常に其心は神を慕ひて離れず、如何に無神論の猖獗を極めたる時代に於ても此神を仰慕するの念慮は未曾て人類を離れしことあらざるなり。彼の佛國巴里に於ては十八世紀中大に無神論の流行したるとあり、其時一人の智なる者無神論者の中に在りて互に神の存在に就きて爭論せしとあ

ブルメルフ曰く無宗教にして國家を創立維持せんよりは空中に市街を建るは易し

りしが、爭論の際前壁に懸けたる時計の突然鳴響して時を報ずるに會したり、彼れ直に之を指して謂ふて曰く「余は時計が時計師を待たずして自然に其進行をなすとは如何に熟考するも熟考するに隨ひて益其理に惑ふ」と。又此時に際し一貴婦人が無神論者に對して至りて鋭敏なる答辭をなしたる一事あり、彼れ無神論者は荐りに此婦人を己の無神論に誘導せんと務めたりしが此の婦人は容易く無神論に意を傾けず、反りて痛く之に反對したれば無神論者大に喜ばずして謂ふて曰く「余は此賢明なる人々の社會に在りて獨り余一人のみ神を信ぜざるものなりとは思はず」と云ひければ、婦人は之に答へて曰く「然り、實に卿一人のみならず妾が家の狗と猫も亦神を知らず、去れど是等不幸なる動物

は敢て之が爲に己を以て傲らず」と云ひしことあり。子は又神無しと云べる語の眞實の意味を知るや、是れ即ち吾は惡漢にして神の存するを恐るゝと云ふの隱語なり。

○第二

マコン曰く解剖學は吾人をして靈魂の不死を信ぜしむ

詰難　三寸息絶ゆれば萬事皆休す、人の死は百般の終極なり。

辨駁　然り、子の言の如く、犬馬・猿猴・鸚鵡其他の動物に取りては其死は萬事の終極ならん。然れども子は己を以て此至賤なる禽獸と同一視するや、曷爲ぞ子は己を卑下するの甚しきや。余試に子が爲に此說の迷妄を證せん。

先づ第一に子は己の人にして禽獸に非ざるを認むべし。宜しく人と禽獸との間、果して如何なる差別の存するかを知

る者なり何となれば解剖せられし死體を見て人とは唯之のみなりと信ずること能はざればなり

るべし。夫れ人は能く事物を思辨し、自由にして善惡を爲すを得るの靈魂を有するものなり。故に人の人たる所以のものは能く事物を思慮し、眞理を知り、善美を愛するの靈魂を有するに由るなり。是れ即ち吾人が他の動物と異なるの特質にして、人若し吾人を指して彼等は禽獸なりと云はゞ吾人必ず之を以て大なる侮辱となすべし。如何となれば是れ人類の至貴・至尊なる特質を滅却したるものなればなり。茲を以て『吾れ死せば吾が爲に萬事皆終れり』と云ふは、殆ど『吾は至賤なる家畜・思想なき獸類にして且つ獸畜中に在りて狗よりも猶無能の者なり、如何となれば余は其疾走するに於て、其遠見するに於て、及び其嗅管の鋭きに於て狗に如かざればなり。又猫よりも猶無能なる者なり、如何となれば余

ヒワレト曰く人の不死なるは神の不滅なる鴻恩なり

は暗中事物を識別するに於て、及び其衣服を要せざるに於て猫に如かざればなり。一言以て之を云はゞ余は家畜中最も劣等なるもの、諸動物中最も不幸なるものなり』と謂ふと何ぞ異ならんや。子若し此輕侮を以て自ら甘ずれば子は其欲する所に從ふべし。又子は之を以て眞實なりと自ら確信せば子は其信用する所に從ふべし。然れども子よ、子は吾人をして吾人が自己を尊重し、大聲疾呼して吾人は人なりと主張するを許すべし。

又第二に人は果して子の想像するが如きものたらんには人の集合體なる此社會は終に如何なる運命に陷るべきかを思へよ。若し此の如くならば現今の社會は化して惡漢兇徒の巣窟となるべし。善と惡との差別は堙滅して善惡の語

ウ、オルロフ曰く地に在て天の爲に生活すべく時間の中に在て永遠の爲に生活すべし

は社會の爲に無用の空名となるべし。掠奪殺戮其他諸の大惡は社會の爲に善行美事と同視せらるゝに至るべし。何となれば人若し如何なる罪業を作るも今世來世に於て其罪業を問はるゝことなく、善者惡者偕に一塊の塵芥と化し去りて同一の運命に服するものたらば、人焉ぞ能く其惡心を放縱にせざらんや。故に此の如き說は社會全般の爲に大なる害毒を流す所のものにして毫も取るべき所なきなり。況や又其事の無根の妄誕にして實理に符合せざるに於てをや。今少しく其理を說かん。

夫れ樹の善惡は其果に由りて之をトするを得べし。善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結ぶ、人も亦此の如し。善者は必ず未來に於て善果を得、惡者は必ず未來に於て惡果を得るや

固より疑ふべからざるなり。又此理を以て推すときは其人の善惡に由りて其果の善たり惡たるを知るに難からざるなり。試に見よ彼の無神論を主張し、靈魂及び來世の存在を擯斥する所の者は果して如何なる性行を有するか、果して如何なる業事を爲すか、又此の如き說を爲す者の父は如何なる人物なるか、其妻は如何なる婦人なるか、余偏に其爲人を知らんことを欲するなり。

凡そ此の如き說をなして社會の德義を擾亂せんと欲する者は必ずや己れ不德義なる品行を爲し、其心中常に神の義罰を懼れ、又社會の彈劾を憂ふるに由るなり。乃ち神の義罰を蔭蔽して其良心の刺戟を防遏し、又社會の彈劾を恐れ、其非を飾りて以て一時社會を籠絡せんとするに過ぎず。故に

金口イオアン曰く
死とは睡眠の永きものに外ならず

彼の徒が最も笑ふ可き唯物論を唱へて靈魂と未來の存在を斥くる其目的たるや、只自己に類似したる不德義者流を汎く天下に募集して以て自己の應援を求むるに止り、決して彼の徒が衷心より自己の存在の消滅を信ずるが爲に非ず、即ち是れ彼の徒が徒に口舌の上に發するの辭たるに止まるなり。宜哉彼の徒が縱令平素口に無神を唱へ、靈魂と來世の存在を排斥するも其死の將に近かんとするや、忽焉其思想を豹變して眞理の前に深く其非を悔ゐ、久しく抑壓せられたる良心の聲は此時始て發動するに至るなり。又此最も畏るべき最後の日に於ては彼の不虔の徒と雖ども敎法の師を蔑視するとなかるべし、祈禱を嘲笑することもなかるべく、天堂地獄の敎理を指して是れ唯愚夫愚婦の信ずる

シセロ曰く縱令其本性は解せざるも神あることを知らざる程に無智蒙昧なる國民は未だ有らざるなり

無稽の妄說なりと誹謗せざるべし。勿論來世の存在を排斥する所の者は皆其死に臨みて正道に復歸すと云ふには非ず、彼の徒のうち最も心、の頑陋にして且つ最も惡に浸染して其良心を毀損したる者に至りては、前に論ずる所のものの例外なりと知るべし。去れど此例外あるは反て前論の眞實なるを證するに過ぎざるなり。

余此論を結ぶに際し敢て子に一言せんと欲す。抑、余が子に論じ來りたる所のものは是れ余一人の私論に非ず、即ち是れ不信者に對する全人類の聲なり。視よ古來より一の民族と雖ども來世の存在を信ぜざるものありしか、死せし父母、妻子、朋友の爲に或は祭祀を行ひ、或は喪禮を營むは是れ時の古今を論ぜず、國の東西、民の開不開を問はず、徧く全人類

ソクラテース曰く靈魂果して死すべきものたらば我等の作りたる罪業も體軀の朽ると共に滅すべし然れども靈魂は不死なり故に我等は未來世の不幸を免るゝが爲に宜しく現世に在て善行を務めざる

の中に顯はるゝ所の俗習にして、此俗習の存する限りは靈魂不滅の眞理深く人心に固結して片時も人心を離れざるを認むべきなり。故に吾人が死と名づくる所のものは敢て消滅の意義に於て謂ふに非ずして唯生活の狀態を變じたるものを指示したるのみ。

曾て一人の敬神家あり、將に其死の近づきしを覺り、妻子を枕邊に招きて之に謂ふて曰く『吾が愛する所の者よ、敢て悲む勿れ、吾が爾等を愛するの愛は永遠に絕ゑざらん、吾今一時爾等と訣別せんとす、去れど之を以て大なる凶事となす勿れ、吾は縱令此地を離るゝも其存在は決して消滅せざるを確信す』と。蓋し此の如き聲は是れ純全無缺なる良心より發したる聲にして基督教會の敎ふる所と更に懸隔を見ざ

可らず、

るなり。嗚呼願くは害毒を現社會に流すの唯物論は遠く去りて吾が邦土を離れんことを、蓋し吾人の良心と常識とは常に之を擯斥して止まざるなり。

○第四

詰難　現世界の事々物々は皆偶然に因りて生じたるものにして決して神の攝理する所のものに非ず。何となれば此世界に不規律の存し、罪惡の存するは其明確なる證跡に非ずや。

辨駁　子は眞實に果して今云ふ所のことを信ずるや否や、余は固より之を信ずること能はざるなり。凡そ此の如き思想の生ずるは職として其心の損傷したるに原由す。子よ己を信ずる勿れ、宜しく私心を棄てゝ公理を索むべし。私心私

かりざりイ曰く病
嫌は日光を好まず
不直は正直を忌み
詐僞は眞實を嫌ふ

慾は恰も酒の如く子の推理力を痴鈍にし、益子をして囈語を吐かしむるに至ればなり。

先づ試に子の謂ふ所の神は吾人人類を主宰するものに非ずと云ふ說を深く玩味せば、果して如何なる願望か其内に潜伏するや。即ち此語の内には放まゝに惡道に趨向し、却て良心の刺激を脫せんとする願望の隱然として發表するを見るなり。且つ夫れ子が謂ふ所の偶然なるものは是れ果して如何なるものを指すか。蓋し偶然とは存在もなく、性質もなく、吾人の爲に毫も了解すべからざるものに非ずや。然るに此の如きものが萬物を創造し、又之を攝理すると謂ふは、是れ即ち原因なくして其結果ありと云ふと異ならざるなり。故に子よ若し世人が數々口に唱ふる偶然、自然、運命など

ブルドフ伯曰く偶然とは神意の隠語なり

ナポレオン曰く知何なる悲母と雖ども神造物主が吾人を扉る如く其子を扉ること能はず

の語を聽かば、其名稱の種々に異なるも其眞相に至りては是れ唯空名にして、不虔の徒が上帝の公義を懼るるに由りて擅に發明したるもの、愚人が事物の本理を解說するに苦めるより徒に想出したるものたることを忘却すべからざるなり。去れば偶然なるものは何物をも宰治するものに非ずして必竟空名無實なること明かならん。而して眞實に萬物を創造し、及び萬物を攝理する者は唯一の全能なる主宰者即ち神おるのみなり。夫れ神は萬物を創造し、之に其目的を定め、其無限の睿智と無限の仁愛と無限の公義とを以て是等萬物をして其目的を達せしむるものなり。而て其性質に至りては無限に完全にして全善・全智・全能なり。故に大は日月・星辰より小は昆蟲・魚介に至るまで萬物一として皆其

モスクワのヒラレト曰く幸福は反て不幸より危殆なる場合あり不幸は反て幸福より善なる場合あり

攝理に係らざるものなく、殊に神は吾人々類を罣慮し吾人に靈妙なる能力を賦與して以て吾人が己の造主を識り、之を愛し、之に奉事せんことを欲するなり。斯の如く神は萬有を罣慮し、其無限なる智能を以て全世界を攝理するものなるに子は何が故に此の神の攝理なしと云ふか。子の說に由れば「此世界の事物には種々の不規律あり不完全にして且つ有害無益なる者あり、又人生の狀況を觀察すれば或者は富貴安逸の家に生れ、或者は貧賤困窮の家に生れ、一は暖衣・飽食・驕奢を盡して其生を終へ、一は惡衣・薄食・辛勞を極めて同じく其生を終ふ。今人生の運命上に此の如き大なる不權衡の存する以上は、決して全善・全智・公義の造物主なる上帝が萬物を攝理するものなりと見做すを得ず、假に余をして

又曰く主神は苦惱を下して吾人を大なる苦惱より救ふ

是等萬物を組織せしめんには必ず尙一層完全なる者を組織せん」と。去れど今子が唱ふる所の說たるや是れ甚だしき自許の考案と謂はざるを得ざるなり。何となれば子は天地間の事物中に偶、己の見解と符合せざるものありたればとて、總て是等の事物を指して不權衡なり、不規律なりと云ふを得べきか。抑、子が此世界の事物を指して無益物なり、有害物なりと云ふは、子が自ら其必用たり、有益たる所以を知らざるに職由するものなり。加之子は其能力上に於ては至りて微弱有限なるものに非ずや、去れば烏ぞ全智全能公義なる神の爲し賜ふ所を濫りに是非するを得べけんや。例之ば今茲に一人の淺智なる者あり、人の顏面を熟視しつゝ之を難じて「何故に人は横目竪鼻なるや、何故に人は眉毛を有す

金口イナアン曰く吾人の爲に利益なるものは神も亦欲し神の欲するものは吾人の爲に利益なるものなり

るや何故に耳目は二にして鼻口は一なるや」と云はば、智者果して之に如何なる答辭をなすか。要するに必ず之を評して云はん「嗟呼淺智なる者や、爾は爾の淺智なるに由りて其理を疑ふ、去れど尙一層其理を究めよ、然らば爾反りて自ら爾の言の非なるを知らん」と。子が神の事業を見て徒に之を誹謗する亦何ぞ之に異ならんや。

夫れ全宇宙は大なる神の書籍なり、而して一百年の世紀は恰も其一片紙の如く、一年の日月は恰も其書中の一行の如く、凡その造物は恰も其一文字に過ぎざるなり。神は總て是等の造物をして各、其位置に安んぜしめ、其奧妙不可思議なる智と其全能の手とを以て是等萬物を配布したり。故に子若し問て然らば何故に神は一の造物をして他の造物に超

えしめ、又一の造物をして他の造物と全く相反するの位置に立たしめたるか、何故に冬の沍寒あり夏の炎熱あるか、何故に世に不幸艱難あるか、何故に惡人其毒を全うし義人反りて短命なるかと云はば、余は此諸問に答へて曰はん、是れ皆無上に睿智なる無限に公義なる無窮に仁愛なる神造物主の聖旨に由りて行はるゝ所の者にして、縱令吾人の目に不完全なるが加く見ゆるも決して然るにあらず、蓋し吾人は未だ神の深意を窺ひ知ること能はざればなりと。去れど尙子に一言せん、凡そ事物の理を適切に論ぜんと欲せば宜しく先づ諸物の理を知り、諸事に通じ、其目的と方法とを適當に比較對照せざる可からず。則ち人の運命の理を論ぜんと欲するが如きも唯今世の狀態にのみ注意せずして宜しく來世の狀態をも考察せざる可からず。而して若し一たび來世なるものを想出せば積日の疑團氷解して其眞理を悟る蓋し思半ばに過る所あらんとす。例之ば吾人は何故に善者の窮阨に罹るあり不善者反りて榮華を極むるありやと疑はば、彼の來世なるものは之を說明して云はん、不善なる者今世に於て果して幸福なる位置にありとせば、是れ神が一時其者の或る善行に報じたるものなり、去れど斯の如き者の幸福は只今世のみに止りて來世は必ず神より之に陪するの責罰を受くべきなりと。又善者にして反りて辛酸を極むるが如きことありとせば、是れ神の睿智なる叡慮に由り此者をして其窮厄の中に在りて益、其善德を增進せしめんが爲なるのみと。凡そ艱難不幸の如きは一方より之を見

ニル曰く艱難を忍べよ蓋し諸德の其中に養成せらるゝこと恰も薔薇花の荊棘の中に在て美なるが如し

マルクス曰く來世の異殊を逃けんと欲せば欣然として現世の異殊を忍耐すべし

れば大に吾人の惡業を媒介する所のものゝ如くなれども、又他の一方より之を見れば甚だ吾人の救濟を得るに助力する所のものなり。故に今世に在りて多く艱難辛苦を嘗めたるものにして今や天國に在り神の聖人として無限の福樂を受る者あり、之に反して彼の富貴榮華を極めたるものの如きは地上の幸福に沈湎して反りて來世の福樂を蔑視し、之が爲めに來世に在りては無限の痛苦に陷り、現世に於て受けし所の富貴榮華を怨惡するに至るものあるなり。斯く來世なるものは恰も吾人の運命を測量する尺度の如し、此尺度ありて始めて神が吾人に對して公義至正なる所以を知るべきなり。故に吾人は先づ暫らく徒に己の運命を悲歎するを止め、只心を盡し、意を盡し、以て萬事の爲に仁愛公義なる神を讃美すべきなり。

○第五

詰難宗教家は徒に來世の福樂を說かんよりは、寧ろ現世の社會を改善し、諸の貧苦災害を掃攘するを謀るべきにあらずや。

辨駁余熟、此至愚なる願望の意義を察するに、此語の中には今も猶全歐洲を攪亂して止まざる至りて危險なる元素を含有するを見るなり。總て邪說に迷ひて自己の非理を世上に傳播せんとするものは其說の容れられんが爲めに必ず世人の慾望に媚るを常とす、故に斯の如き人は來世生存の如き眞理を指して徒に人の妄想より出でたるものとなし、而して人の現世に生活するは單に快樂を得るが爲にし

センチン曰く僧侶者は蜂の如し口に蜜あり亦刺あり

エル曰く肉慾の快樂を惡めよ蓋し體と共に魂をも不淨のものとなす

シリヤのエフレム曰く慾情に導かるゝ學者の頭顱は火烟と灰とを噴出する火山なり

て幸福とは唯富貴驕奢を指すものなりとし、甚しきに至りては此快樂を得るが爲には如何なる方法を擇ぶも可なり、縱令社會の秩序宗教の誡命を破るも各人齊しく快樂を得るに至らば決して妨げなしと說き、現世の社會は苦界にして何地に到るも歡樂を得る能はざる者なれば此社會を破壞して更に之を改造せざる可らず、百般の秩序を一變せざる可らず、若し之をして全く變化せしむるを得ば茲に始めて衆人齊しく幸福を得るに至るべしと唱ふるなり。是れ即ち共產黨社會黨の唱ぶる所の說にして學者社會の中に於ては凡神論と名づくる所のものなり。去れど斯る輩の唱道する所の說の非なることは敢て深く之を研究するまでもなきことにして、若し此說をして眞ならしむれば人類を他動物と區別する所の道德節義品行の如きものは一切消滅して人は外貌に於てのみ禽獸に異なるものとなり、吾人々類の幸福となす所のものも禽獸世界の幸福となす所のものも渾て同一物となりて、人は唯己の諸慾を放逸にし、如何なる方法を用ふるも專ら快樂を達せんとする慘憺たる情態に陷らんのみ。

然れども幸に斯る共產主義は實際社會上に應用し得べからざるものにして、此の如き願望は社會進步の原則に反し、人力の到底爲し得べからざる空想に過ぎざるなり。請ふ少しく其理を論ぜん。

先づ論者の言は果して人類社會の爭ふ可らざる事實とせんか、去れど論者は如何なる方法を盡すも吾人の懊惱と死

亡とを全く社會より驅逐すると能はざるべし。地上に於て懊惱あり死亡あるは是れ吾人々類の俱に免かるべからざる運命にして、此運命は余も子も俱に踐まざるべからざる所のものなり。此運命は曾て吾人の祖先も踐み、亦吾人の子孫も踐まんとするものなり。此運命よりして吾人を脫せしむるは決して人力の及ぶ所に非ざるを信ずるなり。論者請ふ思へ、此世には疾病・勞苦・艱難の如きものなきや、鰥寡・孤獨の如きものなきや、又不和・爭鬪・失望・心痛の如きものなきや、而して此等社會の狀態を變更するは當に如何して爲すを得べきか、如何なる改革は吾人をして此疾病・辛苦より救濟し得べきか、如何に社會を改良せば吾人をして氣候の不順より冬日の沍寒より夏時の炎熱より凶年の慘狀より及び

災禍死亡より救濟し得べきか、又此改良は能く吾人より傲慢・利己・惡念・害心の如きものを掃攘するを得べきか、僅かなりとも此革命は吾人の死亡を防遏し得べきか、否彼等と雖ども自ら其爲し得べからざるを知るならん。故に彼等の爲す所は唯内・己を欺き外・人を欺き以て到底獲べからざる幸福を吾人に約するに過ぎざるなり。

然らば眞正の幸福は吾人果して如何なる處に於て求むるを得べきか。此幸福の必ず存せざるべからざるは余の堅く信じて疑はざる所なり。何となれば仁慈なる聰明なる大能なる神は吾人を創造して吾人に眞正の幸福を預備せざるの理あらざればなり。去れど此幸福を何處に於て尋ね得べきか、他なし此幸福を指示する所のものは神の啓示したる

神學者グリゴリイ曰く吉凶禍福は德を磨する砂石の如し之に遭ふて試を受るに非ざれば德の堅否未だ斷言するに由なし

基督教に於てのみ發見するを得べきなり。即ち其幸福は現世に在りて漸く胚胎し來世に至りて其完全を告ぐべきものなり。世の諸教中唯獨り基督教の教ふる所のみ善く人類存在の大法に符合するの理を說き、且つ獨り苦惱死亡の大問題を解明するものなり。即ち基督教は彼の苦惱死亡の如きを以て皆罪惡の結果なりと教へ、而して勞苦艱難の如きものは現世に於て吾人の免るべからざる所にして是れ神が吾人の行爲を試驗し、吾人を導きて救世主の行に則とらしめ、終には吾人に其天堂に於て永遠の福樂を與へんが爲めに定めたる所のものとなし、又吾人に此勞苦艱難を忍び甘じて之を受くることを教ふるなり。茲を以て基督教は現世來世の理より人の內部外部の事に至るまで一切の眞理

を教へ、社會學などの殆ど論及するを得べからざる眞正の道理を示すものなり。即ち人類が罪惡に墮落したる所以より救世主耶蘇に由りて贖罪を受けたること、又吾人は此救世主の教誨を奉ずべきこと、及び來世永久の福樂等の理を教誨し、彼の共產黨の論ずるが如く只人類の外部のみを論議ずる妄誕不稽の理に基くものに非ざるなり。又社會黨の論ずるが如く唯人類社會の外部のみを觀察して其內部即ち人類の靈魂を忘却したるが如きものに非ざるなり。夫れ基督教に於ては殊に注意を人類の爲に最も貴重なる靈魂上に向け、萬事をして靈魂と永生と神とに歸向せしむるなり。又基督教は其至りて有力なる活動を吾人に及ぼして、吾人の靈魂より倨傲貪慾邪淫自愛及び其他の諸惡質を遠ざ

け、而して人類を墮落せしむる諸惡の根原を治するものなり。凡そ世の災禍は吾人の罪惡より生ずるものなるが故に基督教は力を極めて此諸災禍の本源たる罪惡を滅絶するを努め、又吾人の心に高尚なる和樂を與へ、吾人の良心に最も清快なる平安を與へ、吾人に眞實の幸福を得るの道を示し、以て澎湃たる世海を凌ぎて以て永福の彼岸に達せしむる者なり。左れど基督教は斯く靈魂上の事を大に慮ると雖ども亦靈魂の同伴者たる肉體を忘却する者に非ずして同じく肉體の上にも親切なる斡旋を盡す者なり。即ち之が爲に或は養育院を建て、或は慈善會を設けて人々の苦楚を癒し、艱難を輕からしめ、總て百般の上に就き彼は慈母の配慮を顯はして止まざるなり。故に世若し基督教の命に循ふ時

モンテスキイ曰く奇なる哉基督教や其目的は來世にありて今世にも幸福を與ふ

は貧者の數は減じて、富者は不幸者零落者の伴侶兄弟とならん、此の如くにして縱令世の貧困を全く掃攘するに至らざるも必ず之をして減少せしむると疑ふべからざるなり。貧困をして社會より全く消滅せしむると能はざるは爭ふべからざるの眞理にして事實上社會の歷史に照して明なるとなり。今假りに彼の共產黨の熱心唱道するが如く社會の財產をして全く平均ならしむるを得べしと假定するも、是れ唯一時に止りて瞬間の後再び元の不平均なる地位に變ずること固より免かるべからざるなり。何となれば懶惰者・放逸者は即時に再び貧困に陷るべく、而して其財產は必ず勤勉者・節制者の掌中に歸すべければなり。又人の筋肉・品行・智識に不平均の存する以上は隨ひて社會に地位の上下、

財産の多寡を生ずべきは必然免かるべからざる情勢なり。」基督教會の初世代に當りてや信徒各、神に於けるの愛に動かされ、自ら甘じて己の財産を教會に獻じ、諸物を共用し以て現今共産黨の唱道する所の共産を實行したることあり、而して基督教は後世に於ても亦斯く美なる顯象を呈し、又呈せんとするものなり。故に眞實の基督教徒は現世に在ても猶最も幸福にして縱令多少世の艱難苦楚を嘗るを免れずとするも其心は愛に滿たされ、常に和平安泰にして毫も其心を混亂するとなきなり。然り而して彼の社會黨が吾人に與へんと約する所の者は果して如何ぞや。彼は到底行はれざる空約たるに過ぎずして益、社會上に不服不滿嫉妬暴虐紛擾の如きものを蔓衍せしめ、流血淋漓たる慘狀を呈せしめんとする者なり。一言を以て論者等が唱ふる所を譬ふれば恰も奸商が其廛頭の看板に明日物品を無代價にて販賣すと大書するが如きものにして、其明日なるものは永久の明日にして幾日を經過するも終に其日の至ると無きと一般なり。現今世上には頻りに仁愛慈惠等を說き、人道を論じたる書籍は汗牛充棟も啻ならざるなり。然れども是等より生ずる所の結果に至りては實に微々たるものにして毫も社會の表面に現はれざるなり。是れ何に由りて然る乎、他なし宗教の感化を戴かざるに原由するなり。凡そ物原因なくして其結果あるべからず、唯獨り神に於るの愛は隣を愛するの原因及び諸善の原因なり。

○第六

プルタルフ曰く眞正の宗教は妄信と無神論の兩極間に中立するものなり然るに世に妄信を避けんとして宗教を跳越し增〻大なる災厄に陷り頑愚不經の無神論に歸する者あり禍なる哉此人や

詰難　宗教は唯愚夫愚婦の奉ずべきものにして智者學者の奉すべきものに非ず。

辨駁　宗教果して眞理なる乎、之を奉ずること焉ぞ愚夫愚婦に止らん、智者も信ずべく、學者も奉ずべきなり。何となれば人は皆惡慾を有する者なり、即ち最も猛烈なる惡慾を有する者なり、而して此惡慾は人の當に勉めて抑制すべき所の者にして之を抑制せんには神を畏るゝの心と神に於けるの愛及び眞正の宗教より出づる所の有力なる感化なくんば決して能はざるなり。又人は智者・無智者・學者・無學者たるに拘はらず必ず一般に遵奉すべき所の至難なる重大なる本分を負ふ者なり、即ち神に對するの本分、社會に對するの本分、家族に對するの本分、自身に對するの本分等の如き

ゲーテー曰く或人は宗教を藥として用ふ宗教は食物として用ふべきなり

ザドンのテイホン曰く無形の上帝を念ふこと恰も己の目前に在るが如くし隨在戰兢して常に己の行爲を質す此を眞の賢者と云ふ

は賢愚貴賤の別なく全人類の務めて遵奉せざる可らざる所の者なり。又宗教が因りて以て基く所の神は一家國・一社會の神に非ず、即ち全人類の神にして各人の當に崇尊し敬拜すべき所の者なり。又人類は總て不死の靈魂を有する者なり、故に各人宜しく此不死の靈魂をして冥獄に墮落せしめずして其聖界に救出せらるゝを慮らざるべからず。又現社會には種々の罪惡の浮動するあり、各人務めて之を避けざるべからず。又善道の存するあり、各人務めて踐まざるべからず。天國あり、人宜しく之に入るを務めざるべからず。地獄あり、人宜しく之に陷るを避けざるべからず。最後の審判あり、各人宜しく之を畏るべし。死あり、各人宜しく之に對して靈魂上適當の準備をなすべきなり。又吾人の救主耶蘇基

オーゴストニーコリ曰く他人の善行を見て嘲笑する者は恰も己れ河水に溺れながら他人の水より救はれんとするを嘲笑するに似たり

督は全人類を救贖するが爲めに全人類の罪業を負ひ十字架上に苦難を嘗めて尊血を流し給へり、去れば其訓誡も亦各人務て遵奉せざる可からざるなり。

斯の如く宗教は賢となく愚となく貴となく賤となく人類全般の爲めに一日も缺くべからざる所のものなり。如何となれば人は各々危險なる世路を辿るものにて皆齊く罪惡に沈淪し易き性を有し、加之吾人は常に不品行・不節制・不敬虔なる模範を以て圍繞せらるゝものなればなり。故に各人宜しく意を盡し智を盡して是等諸惡の誘惑を避くるの道を講ぜざる可らざるなり。

○第七

詰難　人は篤實なる品行を有するを以て足れりとす、是れ即ち其者の爲に善美なる宗教にして此上更に要すべきもの有らざるなり。

理學大博士エルチストナウィリ曰く上帝と義務と宗教と道德とは不分離の元素なり

辨駁　然り、子の言の如く是れ或は徒刑場裡の呻吟を免るるには充分ならん。然れども天國に救はれて其無窮の福樂を得んが爲には未だ充分なりと謂ふ可らず。又人に對しては或は充分ならん、然れども至上なる審判者たる神に對しては固より充分なりと謂ふ可らず。子は云ふ篤實なる品行を有する人たらば足れりと、今假りに子の言を以て是なりとせんか、去れど子の言は大に説明を要する者なり、先づ子が稱して篤實なる品行を有するの人となす所の者は果して如何なる人を指すか。余は子の篤實なる品行を有する人と名づくる者は、恰も柔軟なる柳枝の如く人の欲する所に

タセノクラト曰く
爾は他人に惡を行はざるを以て誇ること勿れ宜く進みて善を行ふべし然らざれば爾終に花を開きて實を結ばざるの樹に類せん

隨ひて屈曲する不定の稱たるを信ずるなり。試に子は世の放逸なる青年に對ひ篤實なる品行を有するや否やを問ふべし、彼れ必ず子に答へて云はん、青年の放逸なるは何人と雖ども免るべからざる者なれば敢て篤實と稱するに差閊なしと。併しながら其惡青年の爲に害を受けたる社會の人は果して此青年を指して何とか評する、無論彼等は此青年を指して惡漢と爲すに相違なかるべし。又欺騙を逞しくし唯利之れ求むる貪婪の商賈と、寸暇を窺ひて唯怠慢を事とする工夫と、及び勞役者を虐待し私利をのみ營むの傭主とに對ひ、試に彼等は其事業に於て篤實なる人たるや否やを問はゞ彼等は之に如何なる答辭をなすか。彼等は必ず之に答へて云はん、我等が用ふる計策は只自己の利益を保護するの方法たるに過ぎざるなりと。又彼の蕩子・吝嗇家・暴飲者に問ひて彼等は篤實なる人なるかと云はゞ必ず然りとの答辭を得るならん。然れども是等の者は未だ竊盜者・殺人者として國法に觸れざるを以て子の言ふが如く之を篤實なる人と稱するを得べきか、若し然りとせば余は此簡便なる口實に驚かざるを得ざるなり。子が唱ふる所の『篤實なる人の宗教』とは概ね此の如き者のみ、而して子は猶之を以て善美なる宗教となすか、子は果して右に述ぶる所の者流を指して眞に篤實なる人と見做すか、否決して然らざるべし。子は言はん、予の所謂篤實なる人とは善を行ひ惡を避け總て人の人たる本分を務むる者を指して謂ふなりと。若し此の如き意義を以て之を篤實なる人と云はゞ余は雙手を揚げ

アウグステン曰く
信數なくんば善行も亦なし何となれば善行は善念より生じ善念は信數より生ず

て之に同意を表するなり。去れど子は眞正宗教の感化を要せずして斯くも完全なる品行を脩め得べしと思惟するか、若し爲し得べしと云はゞ之れ世に在りて大なる奇蹟なりと云はざる可らず、何と、なれば余は子が自己に惡慾惡性を有せずと云ふを信ずる能はざればなり。故に子若し此惡性に由りて放逸・驕奢・快樂の如きものに沈淪すと假定せんが、之を抑遏する者は誰ぞや、又子の心・倨傲・懈怠・殘忍に傾向すとせんか、子の手を箝し子の舌を制するものは誰ぞや、良心の命令は能く是等を箝制するを得べしとするか、去れど吾人の良心は無力にして勇悍なる惡慾と戰ひて常に敗走するは事實に照して明なり。惟神を畏るゝの心は能く吾人に惡慾を箝制するの力を與ふるものなり。而して社會の法律

ヒラレト曰く宗教の眞理と道德とは同一物より發したる光線なり故に宗教の眞理若し純潔ならざれば道德も亦純潔ならず

の如きは固より犯罪をして未發に防禦するに足るものならずして、吾人は法律の管理外に無數の罪辜の存するを見るなり。然るに基督教は能く吾人の慾情を箝制し得るのみならず、亦慾情の根源を滅絶せしむるを得るものなり。故に吾人は決して基督教の無量の感化を待たずして其至難なる義務本分を行ふこと能はざるなり。

夫れ人類の罪惡に墮落せしこと極めて深くして神の恩賜を受けたる者と雖ども猶且つ完全に其本分を行ふ能はざるなり。況や此神の恩賜を有せず深く罪惡に浸染したる本性を以て姦惡の世に立つ者は如何して能く其本分を盡すを得んや。去れば余は將に言はんとす、世人若し天啓の宗教たる基督教を待たずして己を篤實なる者と爲さば、是れ只

金口イオアン曰く信敬なき人は能なくして海の激浪に漂ばさるゝが如し

己を欺くに過ぎざるなりと。又余は一歩を進めて言はんとす、若し假りに子が國民たり父たり夫たり子たり友たるの本分即ち一言を以て言はゞ世上に於て善良の人たりと稱せらるゝの本分を正しく行ふ者とするも猶之を以て足れりとなす可らざるなりと。何となれば天に在す活る神は子を造り子を護り子を召して子に律法を與ふる者なり、故に子は神に對して常に崇拜し感謝し又之に祈禱するの大本分を有する者なり。而して此神に對するの本分は彼の親屬朋友に對するの本分よりは重且つ大なること固より言を待たざるなり。夫れ人に對するの本分は遠く其故郷を離るるの日に於て或は止むの場合もあらん、然れども吾人が神に對する本分の如きは縱令何地に到るも止むことなく時と場所とに係はらずして全人類の崇拜し祈禱して愛情を表せざる可からざる所の者なり。且つ子は己を以て篤實なりと認むるが故に神に對するの本分を踐まずしても可なりとするか、否決して可ならざるなり。縱令擧世皆子を指して篤實なる者となすも子若し神を崇敬せざれば忘恩者たるの名固より免る可らざるなり。夫れ神は在天の父たり、子は神に因りて其存在と智性と道德と健全と及び諸福の賜を受けたるものなり、神は子の爲め子の利益及び福樂の爲め現世界を創造し、天上に在りては子に云ふべからざる嘉音を傳へ、子に降福し、子を寬恕し、子を愛し、而して子が天國に到るを待てり。然るに子は自ら其身を回顧せば果して如何、子は能く是等諸恩の爲め神に感謝する所ありしや、何の

トルマチエフ曰く恩寵の吾人に於ける恰も太陽の地に於けるが如し恩寵は吾人を照し暖め且つ活す

アウラミーランド曰く諸府諸氏に命を下す者は多し然れども己れ自身に命を下す者は鮮し

愛と何の敬畏とを以て之に報ぜしや、否子は反りて彼の不信の徒が唱道する種々の口實を借り來りて子に大恩を賦與したる神に叛かんとするの形跡あらざるか。子は總て敬神に屬する行爲を蔑視嘲笑し、神を崇敬せず、之に祈禱せず、之に感謝せず、神の敎と神の法とを度外視する者なり。嗟吁子は實に忘恩者なる哉、而して猶己を以て一の責むべきものなしとし一切の本分を行ふものとなすか、子よ宜しく己を欺くを止め、其唱ふる所の「篤實なる人の宗敎」とは是れ唯意味なきの空言たるを看破すべし。

○第八

詰難　世上には智者學者にして多く基督敎を信ぜざるものあり。

大アシリイ曰く眞正の智者は多言せず常に同一にして其智は神に向ひ其心には神存在す

金口イオアン曰く聞若し己を以て智者と爲さば聞既に智者に非ず

辨駁　誠に然り、是れ即ち敎法の上に於ては世の智力學識の賴むに足らざるを以て、人若し神の眞理を識らんと欲せば宜しく其心を開き謙遜の心を以て之を研究せざる可らざるを示す者なり。概ね世の智者を以て誇り學者を以て衒ふ所の者は先づ第一に物理數理の研究にのみ汲々として敎法上に對しては甚だ冷淡を極め、神の存在及び靈魂不滅の如き眞理を毫も意に介せざるもの多し。故に彼輩が基督敎を信ぜざるも敢て奇とすべきに非るなり、何となれば彼輩は未だ敎法を學ばざるものにして敎法の眞理を究めざればなり。又第二に彼輩は倨傲不遜にして漫りに神の眞理を獨斷し、己を擬して神と同權なる者となし、微弱なる人智を以て廣大邊遠なる神智を一切講明し得べしとなすもの

なり。去れど眞理なる者は暗昧なる倨傲に隱れ明潔なる謙遜に顯はるゝ所のものなり。何となれば神は不遜にして其無限の眞理を獨斷する者を愛せざればなり。第三に彼輩は己を以て無上の智者學者となして常に放佚驕奢の行を爲し、基督教の嚴格なる規責を受るを怖るゝに由りて之を擯斥するなり。

又曰く驕傲は智識の闕乏なる明證なり

然れども世の智者學者たる者は皆擧りて此の如き種類の者なりとは云ふ可らず、却りて世の碩學鴻儒中には敬神者の數常に不信徒の上に超過するを見るなり。而して子若し此事實を訝からば試に詳細なる調査をなして其數を比較せよ、其時には子の迷霧始めて飛散すべきを信ずるなり。試に古代より二十世紀の今日に至る迄の間に於て世の大家

又曰く誓き無智は惡き智識に優る

中敬神家廿人に對し不信者一人の割合なりとするは決して過當のことに非ざるなり。又斯く不信徒の數の極めて僅少なるは不信徒と雖ども本心より其不信を以て甘ずるに非ざることの明證にして、或は危殆の日に於て或は最終の時に於て終には己が曾て嘲笑侮辱を極めたりし宗教の下に膝を屈するに至りし者少からず。此の如き者流は前世紀に於ては特に多くウォリテル派の中より出でたり。例之ばモンテスキヨ、ビュッホン、ラガルプ及び其他の如き是れなり。彼のウォリテル自らも其晩年巴里に於て病を得、至りて危篤に迫りしときには祭司を招きて切に己が爲に祈禱せんことを乞ひたり。去れど一時其病の平癒するを得しかば再び故の不信に變じ終に月餘を經て其靈魂を肉身と共に亡すに

神學者グリゴリイ曰く品行方正篤實なるに非ずんば眞正の智に達する能はず

シセロ曰く罪を行ふは衆人皆然り唯罪過に執拗なるは無智者の所行なり

至れり。時に友人等はウォリテルの死を聞きて走せ集り側に坐せる醫師に向ひて死期の狀態を質せしに、彼は臨終の際大に聖體を渇望しけるが祭司の拒絶を受けし爲め痛く失望して瞑目したりと云へり。又ダラムベルトの如きも其死期に臨みて大に懺悔式を受くるを熱望したりと云ふ。

偖て上來陳ぶるが如く不信徒の數は敬神者の數に比すれば至りて僅少にして、而して其僅少なる不信徒と雖も晩年に至りて或は積年鬱結せる敬神の念を一時に發表し、或は己が過去の罪業を深く痛悼するに至りし者多く、其中終生頑陋にして眞理に抗敵せる者の如きは眞に寥々として僅に指を屈して數ふるを得べし。而して他の一方より觀るに神の敎會の爲め眞理の爲に一身を犧牲に供したる者の如きは實に無數にして殆ど枚擧するに遑あらざるなり。今其重なる者を擧ぐれば大と尊ばれたるワシリイ・神學者と呼ばれたるグリゴリイ・金口と名づけられたるイオアン・メデオランのアムウロシイ・アレキサンドリヤのアハナシイ・說敎者と稱せられたるグリゴリイ・イエロニム、アウグステン及び其他の諸智識あり、總て是等の諸大智識は基督敎會の初代其六世紀間に於て出でたる所の大家にして是れより以後に於て世に出でたる者も亦決して僅少に非ざるなり。而て此の如く世に稱せらるゝ智者學者の中に於て不信者の數は敬神者の數に比すれば至りて僅少にして、且つ人の不信なるは其本性に逆ふ者たるを知らば、何ぞ二三の不信徒に附隨して無數の智者學者が信奉する所の者に多く信

ソコロフ曰く眞正の學問は基督より離れしむるものに非ずして反て基督に近づかしむるものなり

を措かざるや。嗚呼愼むべきは僞哲學者の誘惑なり、嗚呼戒むべきは人をして罪惡の奴たらしむる僞智者の巧言なり。

第九

オーコストニーコリ曰く宗教上の秘義を恐るゝは恰も自身に影の伴ふを恐るゝが如し蓋し影は如何なる地に歩行するも決して自身を離るゝことなし

又曰く不信者の詰難中最も憐むべきものは理解するを得ずと云ふの詰難なり

詰難 余は人智を以て理解し得べき所のものは之を信ずれども、不可思議なる宗教上の諸說の如きは之を信ずること能はざるなり。

辨駁 子は不可思議なるものを信ずる能はずとせば子が日常見、聞、想、記する所のものも亦信ずること能はざるべし。何となれば子は是等の事物を一も適切に理解し能はざればなり。試に問はん子の生命は果して如何なるものなるか、物の音は如何なるものなるか、其色は如何なるものなるか、宜しく余に向ひて適當なる說明を爲すべし。又夢とは如何なるものなるか、何故に吾人の耳は夢の時に於て音聲を感ぜざるか、又吾人の喜怒愛樂の如きは如何なる性質のものなるか、如何して吾人は未だ見ざる所のものを思考し想像し得るか、凡そ是等の諸疑問に對して子は確實なる適切なる說明をなし得べきか、否決して能はざるべし。而して是等の事物は縱令說明し得ざるものなりとするも其存在するこは疑ふべからざるなり。此の如く總て世に存する所のものは一として不可思議ならざるはなく、而して如何なる世の智者學者と雖ども此奧妙不可思議なる萬有の原因目的を適切に理解したる者あらざるなり。然るを子は此不可思議なる萬有を創造したる造物者を理解せんと欲するか、被造物をも知らずして尙造物者を知らんと欲するか、限ある者

アウグスチン曰く信教の奥義は太陽に彷彿たり其本質は測り知るべからず彼の太陽は其光に隨て歩行する者を照すも之を洞觀せんと欲する者の眼目を暗ますなり

をも解せずして尚限なきものを解せんと欲するか、花卉昆蟲の理にすら通ぜずして神と神の啓示に通ぜんと欲するか、萬有すら猶且つ不可思議なり、況や宗教をや、其不可思議なる何ぞ怪むに足らんや、否反りて是れ大能ある神の業たるを示すものなり。夫れ不可思議なる宗教上の諸妙理は之を譬ふるに恰も光輝赫々たる太陽の如く人の能く其本質を視定すること能はざるものなり、然れども人誰か溫柔謙遜なる心を懷きて其光線に接せば必ず其溫熱と光明とを感受して神氣益壯快なるを覺ゆべし。去れど之に反し若し倨傲不遜なる心を懷き强て其本質を觀徹せんと欲せば其靈眼忽ち眩暈して殆ど咫尺も辨ずる能はざるに至るべし。偖て此の如く宗教上の秘義は智識に超越したる者なりと

ヘルソチスのインノケンチイ曰く智識を以て理解し能はざるものは必ずしも法則に反すと云ふ可らず

雖ども決して智識に牴牾する者には非ざるなり。只此二者の間には自ら大差ありて存するなり、即ち智識は自から以て宗教中に潜伏する眞理を發くと能はずと雖も亦之を排するとも能はざるなり、例之ば今茲に宗教が神は無始無終なりと教ふるを聞くも余は如何して神が無始無終なるやを知らざるなり。去れど神は無始に非ず無終に非ずと斷言するとも亦能はざるなり、又之と同じく神の三位一體なる教理に就きても余は如何して一性一體の神が三位にして離れざる者なるやを解せざるなり。去れど解せざるが故に此教理は眞理に撞着する無根の空理なりとは云ふを得ざるなり。何となれば總て吾人が是非する所の者は唯區々たる人智を以て臆測するに過ぎざればなり。故に若し吾人は

神の啓示に因りて神の三位一體にして別れざるを知らば吾人如何ぞ之を信ぜずして可ならんや。且つ此秘義と雖ども毫も吾人の爲に説明し得ざるに非ずして、教會の師父は此秘義を或は太陽に比して教へて曰く『吾人は太陽中に三の異りたる性質あるを見る即ち光線・溫氣及び圓體なり、此三の者は各異なりたる性質の者なれども而も此三者相合して一の太陽を成す』と。此他神の子基督が人體を受けたる秘義、及び人類救贖の妙理、其他諸機密等の如きは總て吾人の理解し得ざる所の者なれども而も一として眞理に矛盾したるものには非ざるなり。余は信ず神は全能にして而して聖書は其眞實なる言なるを、何となれば余は之に對して一方より充分なる證明を有するなり。故に余は全幅を開き

フ、シェッフ曰く信仰と智識は互に相撞着するものに非すして反て互に相補益するものなり敵に非すして至て親密なる姉妹なり

て聖教會が聖書に基きて教ふる所の諸教理を信じ且つ曰はん『宗教上の秘義は智識に超過すと雖ども決して智識に矛盾せるものならずして其信仰は智識の楯となり光となりて之に生命を與ふるものなり』と。夫れ信仰の智識に於けるは猶望遠鏡の肉眼に於けるが如し、吾人は望遠鏡の助を得て未だ見ざるの幽界を知り得るなり。然れども望遠鏡と吾人の視覺とは決して牴牾するものに非ず。之と均しく信仰も亦智識の範圍を遠大にし智識の勢力を堅固ならしむるものなり。信仰は智識を放任して其研究を縱にせしむ、去れど智識が自力を以て到達し能はざる所に於ては信仰之を導きて以て自然以上なる天啓の眞理を指示し、幽邃なる神意を知らしむるなり。則ち智識は宗教の眞理を傳へ其確

エルチストナワイ
り曰く信仰を保つは智識を保つなり
智識を保つは信仰を保つなり

實なるを明證するものなりと雖ども、智識が一度其本務を達し吾人を眞理に導きたる後は已に其本務を盡し終りたるものにして其地位を信仰に讓らざるべからざるなり。茲に至りて信仰は吾人に天啓の眞理を報ず、吾人宜しく其心を開き其命に服すべきなり。其時に至りて子は始めて知るならん子の信仰の純潔なる智力の信仰なるを、又子の智識も子に對して云はん、此信仰の證明は決して子を欺かず且つ自らも迷はざる證明にして天上の眞理を子に傳ふるものなりと。論じて茲に至れば人智を以て理解し得べき所のものにのみ信用を措かんとするは實に其智識の傲慢なると其薄弱なるとを示すものなり。

○第十

ペルシヤのイシドル曰く若し敎を欲せば敎はるることを謀るべし

詰難　余は平素宗敎を信ぜんことを渴望するものなり、去れど如何せん其之を信ずること能はざるを。

辨駁　嗟吁余が友よ是れ子が大なる昏迷なり。子若し永く此迷霧中に彷徨せば彼の畏るべき審判の日に於て子は何を以て己を辨解せんと欲するか。蓋し神は吾人に語て曰ふ『信ぜざる者は罪に定められん』と。（馬可十章十六節）

子は云へり信ぜんとするも信ずる能はずと、去れど子は宗敎を信ぜんとして之が爲に如何なる方法を用ひしか。凡そ人其目的を達せんとせば必ず之が爲に適當なる方法を求めざるべからず。而して人若し其目的を達する方法を忽にせば是れ既に其目的を慮らざるを證するものなり、故に子が宗敎上の信仰を保つ能はずとなすは即ち之に對して適

シリヤのエフレム曰く德行の始は祈禱中の涙にあり善心の始は神の言を聞くにあり

當なる方法を擇ばざりしに由るなり、或は其擇びし方法の不眞理なりしに由るなり。

先づ第一に子は能く宗教上の信仰を得んが爲め神に向ひて祈禱せしことありや。夫れ祈禱は吾人が神より諸の恩賜を受るに必要なるものなり、故に神の諸恩賜中殊に貴重なる信仰の恩賜の如きも亦此祈禱に由りて吾人に下賜せらるゝなり。然るに子は衷心より神に向ひて此信仰の恩賜を求めたるか、否反りて子は冷淡に之を看過し去らざりしや。

又子は眞實神の教を信じて基督教徒たらんとするの決心を有するか、世上には往々善行を願ひて心中潛に其願望の成就するを怖るゝ者あるを見るなり。第二に、子は眞實に眞理を愛するの心を以て基督教を學びしことありや、或は子の疑團を氷解せしむる教師を尋ねしや、否子は眞理を求めずして反りて世の妄誕なる詭辯を喜ばざりしや、總て斯く子をして眞理に抗せしめ子の心をして頑陋ならしむる者は偏に子の自愛心なり。第三に子は若し神が子に信仰の恩賜を與へたらんには能く自己の慾心と戰ひ、神が子より要求する所の潔淨なる志操を保ち、神の聖旨に適ふの生活をなさんとする決心を有するか。

神學者グリゴリイ曰く惡事に固着すると善事に遲滯なるとは同惡なり

偖て以上列擧したる問題は抑も人の信と不信との二途に別るゝ原因なり、即ち凡そ不信の原因は智識の之を斥くるに非ずして罪惡を縱にせんとする慾情之を斥くるなり。故に聖書に曰く『光世に來りしに人々光よりも多く暗を愛せり、彼等の行の惡かりし故なり』と。（約翰三章十九節）實に吾人の慾

モスクワのヒラレト曰く自ら救の道に進まざれば救に達すること能はず

ケンピーのトマス曰く自身の救濟を慮らざる者は惡の甚だしき者なり

情は智識を拘束する者にして若し此の拘束を脱するに非ざれば如何なる智識と雖ども決して其力を顯はす能はざる者なり。去れどこれ固より救主が『信ぜざる者は罪に定められん』と言ひ給へる運命を免る能はざるなり、如何となれば既に慾情の拘束たるを本心より自認して猶之を放任するものなればなり。故に余は切に子に勸めて云はんとす子よ宜しく心を盡し精を盡して聖なる眞理を尋ね、常に絶えずして信仰の恩賜を神に求め、屈せず撓まず耐忍して能く之を續けよ、又謙遜の心を懷きて神の恩賜を受くるに不當なる者と己を認め、其總ての疑問を開陳して大智なる溫和なる教師に訓導を請ひ、殊に日々怠らず聖福音を繙くべしと。其時に至り子は始めて主が求めよ然らば爾等に與へられん、尋ねよ然らば遇はん、門を叩けよ然らば爾等の爲に啓かれん』（馬太七章七節）と云ひ給へることの虛ならざるを知らん。

チエルニゴフのヒラレト曰く基督教より高尚に基督教より純正なる宗教は世上に存せざるのみならず存すべき理由も亦無しトルマチエフ曰く世上何の處にか基

○第十一

詰難 宗教は唯基督教のみ善なるに非ずして總て皆善なり。

辨駁 何爲ぞ子は總ての宗教を目して皆善なりとなすか。察するに子が總ての宗教を目して善なりとなすの主意は、即ち人は基督教徒たると佛教徒たるとを問はず、回々教徒たると偶像教徒たるとを論ぜず、唯善良なる者たらば可なりと思惟するが故なるべし。若し果して然らんには是れ子は總ての宗教を以て皆人智の構造なりとなすなり。併しながら子は何に基きて神を思念し神に奉事するは如何なる

督教の如く神出の明證を有する宗教あらんや

テルトルリアン曰く人類の靈魂は其本性上皆基督教徒なり

意味如何なる方法に於てするも可なりとなすか。抑も子は何人に聞きて總ての宗教が皆齊しく神に受けらるゝ者なることを知りしや。勿論世上には夥多の僞教存するなり、去れど是を以て世上には一も眞實なる宗教なしと云ふを得ず。且つ子が總ての宗教を以て一切人智の構造なりとなすは、是れ全人類歷史の明晰なる實蹟に反する者なり。人類社會の歷史は吾人に明證して云ふ、至上者を信じ至上者を崇拜するは是れ決して人智の構造に非ずと。實に此信仰は古代より今日に至るまで印度・埃及・希臘・羅馬、其他諸國の宗教海に起伏する妄誕虛信の波濤中に屹立して毫も動かざる所の者なり。故に此信仰たるや決して人智の構造せしものに非ずして神が之を吾人の本性に銘記し、其眞理の光線を以て吾人の暗迷界を照射するに由りしものなり。

次に又此信仰を發表するに於て子の想ふが如く果して如何なる信仰も總て皆神に喜ばるるものとなすを得べきか。神の獨一子なる耶蘇を奉ずる基督教信徒の崇拜も、此救世主に抗敵する猶太教徒の崇拜も、又奸智なる僞預言者を信ずる回々教徒の崇拜も、偶像を神視する異教徒の崇拜も皆均く神に納れらるる者なりと思惟するを得べきか。若し然りと云はゞ是れ眞理を究めずして可なり、眞理を尋ぬるの要なしとすると何ぞ異ならん。而して眞理は果して尋究するの要なきものなりや、嗟呼子の愚も亦甚しと云ふべし。然れども子が斯く暴論をなすにも拘はらず神は眞實なる一定の崇拜を吾人に命じ給へり、蓋し諸宗教中必ず諸眞理を

包括し諸異端を排除する一の眞正なる宗教在りて存すべきや論を待たざるなり。故に子にして若しも此眞實なる崇拜を蔑如し、此眞理なる宗教を奉信せざらんには、彼の未來に於て子は必ず懼るべき運命に服せらるべきは決して疑ふべからざるなり。

且つ若しも世に眞正なる天啓の宗教なからんには人類の慘狀將に如何なるべきか、如何して人は己の出所と其目的と其目的を達するの方法と又死後の狀態と神の誡命とを知り得べきか。抑も吾人の智識能く之を明示するを得るとなすか、否々智識は決して之を明示する能はざるなり。智識は唯是等の諸眞理を臆斷するに止りて之を明示するの力なく、反りて吾人を導きて荒誕なる妄說中に彷徨せしむると

ジ、ルーソー曰く
基督は光なり我等其光を受けん基督は眞理なり我等其眞理を聞かん基督は途なり我等其途に從ひて行かん基督は獨り眞實の主なり教師なり牧者なり將軍なり我等其僕となり弟子となり羊となり兵士とならん

アレキサンドリヤのクリーメント曰く聖書は純金を他

多き者なり。而して又全智全善なる神は吾人を放任して吾人に其聖旨を知らしめざるの理ありとするを得べきか、否神は既に其眞光を以て吾人を照し、吾人に其性質と其公義及び仁愛を啓示し、又吾人に善惡の標準を指示し、薄弱なる人智の虛光中に不變なる天上の眞光を照射せり。此眞光とは即ち神の啓示に基き獨り人心を滿足せしめ、完全なる德義を敎示し、神意と萬物の理法とに適合するの基督敎是なり。而して此基督敎の天啓の宗敎たるを證するの例は實に無數にして、已に世界の初時に於て或は神約を以て、或は預言を以て、或は禮典を以て之を證明したり。是等の諸證は總て舊約聖書の中に明記せられて今も猶世に存す、故に吾人は之に就きて毫も疑念を抱くべきに非ざるなり。之を書し

たる者は大奇能者なるモイセイにしてモイセイは實に此書を祖先傳來の遺言に依り、或は自身の目擊したる實跡に基きて之を記したり、彼れ如何ぞ其有らざりしことを記するを得んや。併し此書を以て若し單にモイセイ自家の書なりせば其人爲に出づるを以て固より深く信用を措く能はざるべし、然れども若し精密に此書の性質を熟察せば此書の實に天啓たるを疑ふ能はざるなり。且つ此最も奇異なる書籍は唯神官僧侶輩の手中にのみ潛伏するものならずして公に世人の眼前に露出せられ、各人の購讀に任ぜられ、彼の猶太人の仇敵たりしサマリヤ人と雖ども猶此書の確實なるを疑はずして之を神聖なるものとして崇敬したり。

此の如く基督教は獨り世界開闢の原始より起り、今に至るまで綿々として世に存する無比無類なる宗教にして、而して其時代は三期に分類するを得べし。即ち

第一期はアダムより始りてモイセイに至る迄の祖先の宗教時代なり。

第二期はモイセイが神命を受けしより救主基督の降臨に至る迄の猶太教の時代なり。

第三期は主基督が垂教せられてより聖使徒等が之を傳播し、聖公使徒の教會が今日に至る迄純粹に保守する基督教の時代なり。

斯く基督教は恰も人に幼年少年成年の時期あるが如く種種の時期を經て今は成年の時期に達したり、去れど子は茲に至りて或は問をなして云はん、何故に天下の全民は皆神

の啓示を受けざりしか、何故に今も猶天下の全民は皆基督教徒たらざるかと。余は之に答へて曰はん、人若し煌々たる明光に對立するも自ら其眼を掩ひて之を見ざれば如何なる明光も其眼中に入るの由なきなり。吾人が神に對するの關係も亦之と均し、神は常に絶えず其存在の明光を放つて吾人に示現しつゝあるなり、去れど頑迷固陋の人々は自ら眼を掩ふて之を認めざるなり。又吾人は基督教の眞理にして萬民の內心を照射するの明教たるを知るは固より難きに非ざるなり、蓋し明光は暗中に隱滅するの理なく必ず世を照さゞる可らず、然れども人之に注視せざるを如何せん。只眼ある者は宜しく視るべく、耳ある者は宜しく聽くべし。昔時猶太人は不潔不淨なる萬民中に孤立して獨り至潔なる生活を保ち他の民族をして數々榮を主耶華和に歸せしめたりき。

アウラミイランド曰く基督教の懷の中にて養育せられたる小兒は古昔の大學者が識り得しよりも尙一層明に神と永生の眞理に通曉す

以上論ずるが如く實に基督教は萬世に通じ萬民に適する唯一無比の宗教にして、實に永遠より始りて永遠に至り、神より出でゝ復神に歸着する所のものなり。而して其教ふる所のものは神の教たるに背かず總て神聖にして又總て眞理なり。故に若し誰か公明無私の心を以て誠實に之を學はば必ずや其中に諸善諸美諸德の充滿するを發見するに難からざるなり。去れば余は今此基督教の實に眞理の教たるを證するが爲め子に其眞理の一斑を左に示さん。

第一に基督教の教祖たる基督の生活は實に至聖無玷にして凡常人に卓越したる高德を有したり。

第二に此教は他教に於て其比を見ること能はざる神聖高尚なる教義を含むものなり。

第三に基督の行ひたる諸奇蹟は決して疑ふべからざる實跡にして、其敵と雖ども之を斥くること能はざりしなり。

第四に數世の前に舊約聖書中に預言せられたる主の光榮なる復活なり。而して彼の弱信なりし使徒等も此復活の實蹟を目擊して始めて其眞實なりしを覺えたり。

第五に信徒五百餘人の目前に於て行れたる主の昇天なり。

第六に無智卑賤なる漁夫より出でゝ全世界を壓倒するの大教師と化したる使徒等が全地を周遊して行ひたる諸の奇蹟異能なり。

第七に基督教會が內部外部の種々なる窘迫を受くるにも拘らず益、全世界に波及せんとするの形勢なり。

第八に眞理の燈光を以て昏暗の妖霧を拂攘したる教會諸師父の高德なり。

第九に眞理の爲に剛毅果敢にして公義の爲に百折不撓なる聖教徒の行爲なり。

第十に基督教が社會に及ぼしたる大功蹟と其萬民萬世に適合すること是れなり。

以上列擧する所の者は皆全能なる神の行爲たるを吾人に證する者にして、人力を以てしては到底斯る大異跡を行ふ能はざるや明なり。是に由りて子は既に知るならん、眞正の宗教とは唯一の基督教なるを。而して彼の猶太教の如きは唯基督教の前驅たりし者にて救主基督の降臨すると同時に基督の生涯を最も輝く證明するものは基督教徒の生活なり

に必ず廢滅に歸し、其地位を基督教に讓らざる可からざるものなり。基督教の前には猶太教も眞正の宗教たりしなれども現今の猶太教は之を眞正の宗教となす可からざるなり。其他の宗教即ち回々教・印度教・異教等の如きは、皆人智の臆想より出でたるものにして眞正宗教を贋造したるに過ぎざるなり。故に子よ以後は必ず諸般の宗教は皆善なりとの言を復する勿れ、人類の爲に必須なる宗教の眞理を識らざるは已に神前に大罪あり、況や冷淡にして之が眞理を究めざるに於ておや。

○第十二

詰難　基督は宜しく之を大聖人となすべし、去るを之を神視するが如きは豈に愚の至りならずや。

ルーソー曰く若しソクラテスの行爲と死とは其聖人たるを證せば耶蘇基督の行爲と死とは其眞神たるを證するものなり

ヘルソチスのインノケンティ曰く基督の神智は其教誨中に顯然たり故に之を證せんとするは恰も太陽の發光するを證せんとするに等し

辨駁　否々子よ宜しく思を沈めて今子が評する基督の言を聞くべし。基督曾て子の如き者に答へて云へり、我は誠に神の子なりと。（馬太二十六章六十四節）又曰く「我斯く久しく爾等と偕にするに爾未だ我を識らざるか、我を見し者は父を見しなり。我の父に居り、父の我に居ることを爾信ぜざるか」と。（約翰十四章九節十節）今若し此重大なる問題を詳細に論述せんとせば數卷の書を重ぬるも猶足らざるなり、左れば余は大略して聊か子に基督の實に神たるを證明せんとす。

夫れ基督教の福音書は基督一代の活歴史にして其中に記する所のものは皆當時の猶太教徒及び基督教徒の眼前に於て行はれたるものなり。且つ其中に記する所の事實中には毫も脩飾を用ひたる點なく、事實を枉げたる跡なく、完く

有の儘を直筆したるものなり。故に人若し此福音書を一讀せば基督の實に神たるを知ること難きに非ざるなり。先づ此書中に錄する基督の爲人を以て宜しく他の高名なる者と比較すべし、其差果して如何ぞや。世の俊傑偉人と稱せらるゝ者の生涯は頗る喧噪にして而も社會に大波瀾を生ぜしめざるはなきなり、去れど彼等が世上に與へたる遺物は何ぞや。彼等の名聲は一時世上に藉々たりしこともあらん、併し數世の後には只其名を史上に留むるのみにて世人復た之を顧るものなきに至るなり。而して基督に於ては果して如何ぞや。基督は一たび世に降りてより以來常に世と離れず、且つ何處にも存し、普く世界の中に存在するを見るなり。彼が降世せしは今を距る殆ど二千年前なり、而も今日に至るまで地球上の遍地に於て世人が彼を愛し、彼を嫉み、彼を辯護し、彼に抗敵し、彼を褒め、彼を貶するは猶基督在世の當時と毫も異なるなきなり。彼は全人類の最大問題が蝟集したる燒點となりて常に世に存在し、世に命令し、又世を教誡し、其生命は不朽にして永く基督教中に存し、縱令世は幾春秋を經るも、縱令人類の生命は幾變遷を重ぬるも、基督の生命は此新陳代謝變遷無常の中に在りて毫末の消長なく、永遠不死のものとして立つなり。故に基督は人類を超越したる人類以上の者なること其實蹟に照して明々なり。

ヒラレト曰く唯基督教に於てのみ人は完全なるを得べし

加之基督は實に諸善諸德の模範となりて德義世界を一新したるものなり。世界を擧げて基督の言行より外に果して他に道德の模範ありや。試に世の稱讃する聖賢と基督とを

比較せば其間果して如何なる徑庭ありや。凡そ人類社會の目して完全となす所のものゝうちには必ず多少缺點の存するは免れざる所なり。故に舉世仰讃して大聖となすものの如きも若し基督に比せば殆ど其徒弟たるに過ぎざるなり。彼の光輝燿々たる旭日の東天に昇るや人造の光は即時に其明を失ふべし。此の如く基督の光芒一たび世に映じてより世の虛光は忽然として其明を失ひたり。基督自ら曰く『我は世の光なり』と。（約翰五章五節）基督は實に世の光なり。光の源なり。晦冥の世何れか其照射を被らざらんや。

ルーソー曰く基督は決して人の想像せし小說上の人物に非ず何となれば

次に又基督のみ獨り之を有して其神たるを明證する最も奇異なる點あり。即ち基督は己を以て萬國萬民の模範たらしめ老幼貴賤の別なく、智者無智者の差なく、皆其感化を受

基督の行爲は人の想像し得べきものに非ざればなり

けざる者なきに至らしめたるもの是なり。而して其模範は各人に適合して各人を矯正する大能力を有す。去れば此一事に於ても基督の神たるを知ること難きに非ざるなり。何となれば他人は能く此の如きを爲す能はざればなり。

尙此外基督の完全なる盛德には毫も過度なる所なく、能く中正を得たることも亦最も其神たるを證するに足るものなり。凡そ人に在りては其性質上に於て多少過度なることろあるは必ず免れざる數なり。或者は己の尪弱なるを感ずるの餘り善道に背馳するを恐れて其行爲を過度にまで及すわり、或者は世俗の羈絆を脫せんとするが爲に終には自身を圍繞する一切の者に對して轉た無情なるものと變ずるあり、總て何人と雖ども完全なる德操を涵養せんとせば

必ず其性の脆弱なるを感ずるは人生の常たり、然れども耶蘇基督にては其行爲中一點の過度なるところなく、毫末の瑕瑾なく、弱點なく、其言行は完全にして且つ眞理なり、去れど基督は單に神性をのみ有するものに非ずして亦之と共に人性をも兼有するものなり、即ち基督は神人二性の合體なり、故に基督の模範は決して人の履行する能はざるものに非ず、却りて人の爲に最も望ましく且つ最も好ましき所の模範にして、人類道德の標準として呈出せられたる所のものなり。

次に基督の敎も亦實に眞神の敎たるを確證するものなり。此事は十九世紀間諸碩學諸大家の頭腦を占領したる一大問題となり、諸國諸民の種々なる論評を受けて幾多の社會

ロウデストワエンスキー曰く若し人類社會に基督敎の命ずる全法を入れて基督敎の禁ずる一切を社會より出すを得ば其時こそ世は變じて樂園となるなれ。

金口イオアン曰く聖書を有する者は

幾多の人物に遭遇したり、然れども何者も適當に之を辨妄したることなく基督敎の最も怨敵たりし者と雖も其非を擧ぐるに苦み、其敎は依然として世の光となり、種々の反抗は反りて益基督の預言をして眞ならしむるに至れり。彼曰く「天地は廢せん然れども我が言は廢せざらん」と。（馬太廿四章三十五節）

而して此聖言の到達したる處には必ず眞正なる自由の文化伴はれ、進歩と文明と踵ぎ至り、智識道德の善果を發表するに至る。之に反し此聖言の影響を被らず、此聖言に依りて宰治せられざる處には必ず退歩、蠻行、滅亡、及び德義の頽敗とを來すなり。此の如く彼れの聖言は吾人に道德上の新世界を開き、學問智識界の燈明臺となりたり。故に基督に對し最も敵意を抱きたる彼の猶太人の如きも己の感情を制す

大なる利益と慰藉とを受けん靈上貧人は聖書を一目せるのみにて已に聖意を解するを得べし

る能はずして驚嘆して言へり「未だ斯の人の如く言ひしことあらず」と。（約翰七章四十六）人若し福音書を繙きて深く基督の言を味はゝ實に其言の平易無飾にして而も無限の威嚴を具ふるを發見せん。彼は事物を討議せず、之を論證せず、一言を以て諸問を決し、一行を以て諸疑を闢き、且つ無限の權威能力を以て己の神性を明言したり。嗟吁基督實に神たらずして如何ぞ此の如く大言するを得んや。彼は敷己を贖罪主と名づけ、救世者と名づけ、神の子と名づけ、又神なりと直言し、約翰福音書の全編は皆基督が其神性を證したる事跡を以て塡塞す。今試に其一二を例せば彼の猶太人等が基督を環りて「若し爾ハリストスならば明に我等に告げよ」と云ひし時、耶蘇答へて曰く「我爾等に告げたり、而して爾等信ぜず、我の

我が父の名に因りて行ふ事は我が爲めに證を作す」と。（約翰十章二十五節）又或時彼は集り來れる猶太人を敎へて曰く「父が死せし者を起して之を生かすが如く、子も亦欲する所の者を生かす。……衆皆子を敬ふこと父を敬ふが如くせん爲なり。子を敬はざる者は彼を遣はしゝ父を敬はず」と。（約翰五章廿一、廿三節）又ニコデムに語て曰く「天より降りし人の子仍天に在る者の外に天に升りし者なし。……蓋神は世を愛して其獨生の子を賜ふに至れり。凡そ彼を信ずる者の亡ぶるなく乃永遠の生命を得ん爲なり。……彼を信ずる者は定罪せられず、信ぜざる者は既に定罪せられたり。神の獨生の子の名を信ぜざりし故なり」と。（約翰三章十三、十六、十八節）

以上引照したるが如く基督の言は一讀して實に無限の權

能を有する神の言たるを識得するに足れり。噫誰か無上の尊貴光榮を有する神に非ずして能く此の如き權能あるの言を出し得んや去れば余が親愛なる友よ子は宜しく心を盡して基督を崇拜し、之を信じ、之を愛し、一身を抛ちて其大能なる保護に依賴すべし。然らば子の疑團も忽時に氷解して其無限なる神恩を感ずるに至るべきなり。夫れ耶蘇は吾人人類の爲に地に降り其尊血を流して人類を救贖し、永く暗昧中に彷徨したる人類をして復た眞神に歸せしめたり。然るに、吾人人類は其大恩に浴して猶彼が眞理の言を疑はんとするか、凡そ神の言は罪人之を聞きて恐となすも信ずる者に在りては「神の能なり」（哥林多前書一章十八節）

ケンピーのトマス曰く基督に敵せんよりは寧ろ全世界を敵とするに若かず

㊀第十三

エピクテト曰く爾若し學ならんを欲せば先づ己を惡なりと認むべし

アウゲスチン曰く全世界に愛敵の二字より驚くべきもの弗ず

金口イオアン曰く聖事を行へよ然れども既に爲せし聖事を忘るべし

詰難　余は福音書の教誨のみを遵守して純粹なる初代の基督教を奉ぜんとす。

辨駁　子は誠に福音書の教誨のみを遵守せんとするか、若し果して斯る決心ならんには子は重任を以て己に負はしめたるものにして子の爲に之より重且つ大なる本分あらざるなり。併し子は福音書を學びて基督が其教徒より要求せし高尚なる德操を了解せしや、抑も此德操たるや昔時の大聖等と雖も生涯之を得るに苦み、唯熱涙の祈禱を捧げて神を賴み神の恩寵の祐助に依りてのみ之を得たりしなり。而して彼等は縱令之に達したりと雖ども決して福音書の聖誡を悉く皆完全に遵守したりとは言はざりしなり。子よ先づ福音書の聖誡を熟讀して其要求の實に至大なる

を思考すべし。夫れ福音書の聖誡は單に敵を寛恕するを以て足れりとなさず、反りて敵を愛することを命ず。慈惠を施すのみを以て充分なりとなさずして右手の作す所の善事を左手既に之を忘失するを命ず。又啻に潔白なる品行を命ずるのみならず其眼を慾界に放つことをも禁じたり。其外福音書の誡命する所に據れば常に惡慾と鬪ひて多難なる十字架を擔ひ、力を盡し精を凝して基督に隨從し、其に聖なる軌範に則らざる可からざるなり。而して右に述ぶる所のものは教徒たるものゝ必ず履行すべき本務なれども子は果して之を容易のことゝなすか。子は福音書の教誨のみを遵守せんと云へども福音書に於て教誨する德行より尙大なるもの果して存するを得べきか。

次に子は純粹なる初代の基督教を奉ぜんと云へども抑も子は何を指して初代の基督教となすか。若し子の言は初代基督教徒の信奉せし教理を指すものとせば宜しく基督直傳の教理を純粹に傳ふる聖教會の示教に循ふべし。若し子の言は初代基督教徒の生活を指すものとなすか、果して然らんには此の子が願望は決して何人の爲にも達する能はざるなり。夫れ初代の教徒等は心を純にして基督を戴き、力を盡し精を盡して基督の言を守り、己の財を擧げて之を慈惠に費し、晝夜殆ど間斷なく祈禱と禁食とを以て其德を脩め、基督の爲には欣喜して慘苦と致命とを甘受したり。子は此の如き初代教徒の盛德と堅心とを聞きて充分之に則とり得べしとなすか、而して又正教會は決して子より無理な

る要求をなすに非ざることを曉らざる乎。

㊀第十四

詰難　余は余が自身の宗教を奉ぜんことを欲す。蓋余は神に服從するも人に服從するを欲せざるなり、去れば如何ぞ教會及び教會の誠命に服從するを要せんや。

辨駁　然れども子が奉ぜんとする自身の宗教とは抑も如何なる宗教を指すか、是れ或は子が放佚なる品行を保たんとするの口實に非ざるか。又は宗教上の虛禮のみを履行し己の嗜好する行爲のみを務めんとするに非ざるか。噫子は子は若し此の如き宗教を奉ぜんとせば決して公義至聖なる神に喜ばるゝ能はざるなり。且つ斯る宗教は人をして屬神的の生活に轉ぜしむること能はざるなり。又斯る宗教を

ケンピーのトマス曰く眞實なる安心を得んとせば諸慾に服從せずして宜しく諸惡に抗すべし

奉ずる者は只名義上に於てのみ基督教徒にして到底他教人の誹を免れざるや必せり。

子は言ふ余は神に服從するも人に服從するを欲せずと、然れども子は基督が其門徒に語げ給ひし言を聞かざるか。基督曰く「爾等に聽く者は我に聽く、爾等を拒む者は我を拒む、我を拒む者は我を遣しゝ者を拒むなり」（路加十章十六節）而して主耶蘇が斯く門徒に與へたる特權は敢て使徒等のみ之を專有するに非ずして彼等の後職者も亦按手の禮に因りて此特權を繼續するものなり、其證は主耶蘇の言によりて明なり。

耶蘇門徒の爲に天父に祈禱して曰く「我唯彼等の爲にのみ祈るに非ず、乃亦彼等の言に緣りて我を信ずる者の爲なり。願はくば皆一と爲らん、父よ爾が我に在り、我も爾に在るが

如く願はくば彼等も我等に在りて一と爲らん」（約翰十七章二十、二十一節）又耶蘇は地上を去りて將に昇天せんとする時其門徒に語て曰く「視よ我恆に爾等と偕にして世の終末まで在るなり」と。（馬太廿八章二十節）是に由りて之を觀れば各人必ず神の自ら創立したる教會に服從すべきこと明なり。故に子が教會と教會の誡命に服從すべき理由なしと云はば余は之に答ふるに主耶蘇が自ら教會を設立したるの一證を示して足れりと信ずるなり。然れども若し之を以て不充分となさば余は尚一層綿密に此眞理を左に論ぜんと欲す。

夫れ教會設立の至りて要用なる所以は主耶蘇及び聖使徒の教誨を純粹に保存するにあり。然るに之に反して信徒若し各聖書の教義を獨斷し、自在に聖傳を取捨し、教會の誡命を度外視するに至らば果して基督及び使徒等の教誡を純正に保存するを得べきか。是れ即ち教會設立の必要なる所以にして若し教會なかりせば到底此紛雜を免かるべからざるなり。

且つ夫れ基督教の本づく所の聖書は大に解釋を要するものなり、故に使徒も亦云へり「文に非ずして神の役者なり」と。（哥林多後書三章六節）吾人若し聖書を讀みて其意義を字句上にのみ拘泥して解釋せば前後矛盾するの點を發見すべし。斯る場合に臨みては獨り教會を除くの外他に能く其眞意を解釋するものありや、去れば教會の大師父等と雖ども聖書を解釋するに於ては最も苦心熟慮を盡したり。況や凡常人が隨意に之を解釋せんとするに於ては其誤解を免れざるや必然

カラムウン曰く必要なるものを欲せざると餘分なるものを欲するとは同じく罪なり

にして、彼の異端者の起るが如きも畢竟皆自身の力を頼みて聖書を隨意に解釋せんとしたるに原由するなり。而して是等の異端邪說を排除撲滅するものは聖なる敎會を措きて他に決して之なきなり。何となれば敎會は常に聖神に導かるゝが故に誤謬を來す能はざるものなればなり。基督門徒に語て曰く『眞實の神。來らん時爾等を凡の眞實に導かん』と。（約翰十六章十三節）又一方より公會を以て諸疑問を決する敎會の制度に就きて考ふるも敎會に誤謬の存せざるや明なり。凡そ一國一社會に在りて公法を制定するには必ず一個人に之を委任せずして衆議に由りて之を決するを常とす。然らば敎法上に於ても亦同じく諸疑問を公會に於て決し、一個人の隨意なる擅斷を禁ずるは豈に理の當然なるものに非ずや。

抑も主耶蘇基督は己の敎會を地上に設立し十二人の使徒を選びて之に罪を繫ぎ釋くの特權を與へ、又復活して後四十日の間屢門徒に顯はれて彼等に敎會設立のことを語げ、且つ『其時彼等の智識を啓きて聖書を悟らしめ』（路加廿四章四十五節）門徒に語て曰く『爾等言はんとするに非ず、乃爾等の父の神は爾等の裏に言はん』（馬太十章二十節）『爾等を接くる者は我を接くるなり、我を接くる者は我を遣しゝ者を接くるなり』（馬太十章四十節）『我誠に爾等に語ぐ凡そ爾等が地に縛る者は天にも縛られ、爾等が地に釋く者は天にも釋かれん』と。（馬太十八章十八節）斯く聖使徒等は主耶蘇より罪を縛り釋くの權を賜はり、又己の後任者を選定するの權を受け、各地を徑行して敎會を設立し、信徒

をして其命に服せしめたり。即ち聖書に曰く「爾等の敎導師に順ひて之に服せよ、蓋、彼等は神の前に答を爲すべき者として爾等の靈の爲に儆醒す」（希伯來書十三章十七節）而して使徒等は各敎會に誡命を與ふるに當り曾に書に於てするのみならず亦口傳を以てせり。此口傳は即ち正敎會が聖傳として聖書と共に利用する所のものにして其出處は均しく救主耶蘇の敎誨に起因するなり。耶蘇最終の日に於て其門徒に語て曰く「我尙多く爾等に言ふべき事あれども爾等今容るゝ能はず、然れども彼即眞實の神。來らん時爾等を凡の眞實に導かん」（約翰十六章十二、十三節）「我が此を爾等に語りしは爾等が時の至るに及びて、我が此を爾等に言ひしを憶ひ起さん爲なり」（同十六章四節）次に聖使徒パウェルも亦此聖傳のことをテイトに語て云へり、

「我れ爾をクリトに留めしは、爾が缺けたる所を補ひ、及び各邑に長老を立つることと我が爾に命ぜし如くせん爲なり」（提多一章五節）又フェサロニカ人に書を送て曰く「兄弟よ故に爾等堅く立ちて我等の言或は書を以て敎へられし所の傳を守れ」（帖撒羅尼迦後書二章十五節）及びコリンプ人に語て曰く「我が爾等に傳へし事は我の主より受けし所なり……其餘の事は我至る時之を理めん」（哥林多前書十一章二十三、三十四節）

是に由りて考ふれば基督の敎誨は悉く皆聖書中に載せ盡されたるものに非ずして其他多くの敎誨は使徒等の間に口傳を以て保存せられたるや明なり。故に聖傳は聖書と並び立ちて同等の價値を有するものにして又此聖傳なるものは全敎會が最も熟議を盡したる後之を公認したるもの

なれば其正確なることと疑ふべからざるなり。又一方よりして論ずれば聖なる教會は決して誤謬に陷ることと能はざるものなりと言ふを得べし。何となれば使徒の言ふ所に依れば教會は「眞實の柱及び固なり」（提摩太前書三章十五節）教會は「使徒と諸預言者との基に建てられたりイヤスハリストスは自ら其隅石なり」（以弗所書二章二十節）且つ主耶蘇が「地獄の門は之に勝たざらん」（馬太十六章十八節）と云へる確固なる約を有すればなり。

彼の初代教會に於て信者の數漸く增殖するに隨ひ教義上儀典上に於て種々の疑問起りしかば使徒等は之が爲に公會を開くの必要を感じ衆議を以て之を決したりき、此事は載せて使徒行傳の中にあり。後世全地公會を開きしも此先例に循ふものなり。而して使徒の公會に於ては各々同權同

格を有し決して彼此上下の差別なく皆心を同くして事を議したり。此の如く後世の七公會が議定したる所のものも其性質上に於ては使徒等の公會と毫も異なる所なきなり、何となれば是等七公會は各地教會の知識高德等が相集り各其教會を代表して教義儀典等に關する諸疑問を決定したるものなればなり。是を以て全地教會が公認したる制定は何人と雖ども之を變更するの權なく此制定に離叛する者は基督に離叛すると一般なり。

斯く全地公會は無限の大權を有するものなれば總主教大主教等の如きものをも罰責するの權能を有し、一箇人は決して此特權を有する能はざるなり。何となれば使徒等の中一人も此特權を有せし者あらざればなり。之に反して一地

方公會の如きは只一主教管理の下にある數教會の代表者が相會して其一地方教會の制度を議決するに止まるものにして彼等は決して全地公會の制定に反するの議決を爲すべからず、又毫末の變更をも之に爲すべからざるなり、故に此一地方公會の議決は只其一地方教會内に於てのみ効力を有するなり。

以上論じ來りたる所に由りて子は既に教會に服從すべきことの大要を知りしならん。故に余は今唯基督の言を引きて此論を結ばんとす、主耶蘇曾て門徒に命じて曰く「若し教會にも聽かずば爾の爲には異邦人と税吏との如くなるべし」（馬太十八章十七節）

○第十五

詰難　眞正なる基督教は既に人爲を以て甚だ損傷せられたり、故に余は損傷を被らざる純全なる基督教を奉ぜんとす。

辨駁　子は基督教が人爲に因りて甚だ損傷せられたりと云ふも其之を損害したる者とは抑も何人を指して言ふなるか、教會の大師父等が之を損害したりとなすべきか、否彼等は聰明洪德にして聖神の恩寵を滿被したる者なれば基督の遺業を損傷せんと欲するが若きとあらざるなり。且つ子は宜しく基督の遺業を損傷せんとするは決して人力の爲し得ざるものなることを認むべし。基督は己の教會のことに就きて語て曰く「地獄の門は之に勝たざらん」と。（馬太十六章十八節）地獄は常に教會に對し種々の謀計を盡して之に抗

カラムウン曰く眞理は如何に水中に沈めんとするも必ず浮び出づ

敵すれども基督の教會は更に動搖することなく依然として確立するなり。何となれば教會は堅固不拔なる活神の基上に建つものなればなり。去れば基督の遺業を損傷せんとする者は本と基督の教會に非ずして異端邪說を構へ、基督の誡命に違ひて隨意に自說を構造し、世人を誘ひて純正なる教會に離反せしむる者にあるなり。故に子よ正邪曲直を混視することなく宜しく其區別を立て外羊內狼なる僞教師に惑はさるゝ勿れ。使徒パウロ吾人に之れを誡めて曰く「肉の念は死なり、神の念は生命なり平安なり、蓋肉の念は神に對して仇なり、神の律法に服せず且服する能はざればなり」（羅馬八章六、七節）「兄弟よ我れ爾等に求む、爾等が學びたる教に反して分爭と誘惑とを爲す者を注視して之を避けよ、蓋此く

の如き者は我等の主イヤスヽハリストに事へずして己の腹に事へ、巧言媚語を以て質朴なる者の心を欺く」と。（羅馬十六章十七、十八節）

○第十六

詰難　基督教の各宗派は皆大同小異なるものにして此中に眞正なる基督教會を發見するを得ず。

辨駁　若し果して此諸教派中互に相ひ背馳するの教點を有するものたらば決して彼と此とを同一視すること能はざるなり。何となれば眞理は常に一にして二あるべからず。故に子よ宜しく思ふべし先づ聖公使徒の教會が教ふる如く基督を以て神となすものと、彼の異端者が教ふる如く基督を以て通常の人となすものとを同一視するを得べきか。

聞學者アリゴリイ曰く眞理を愛せざる者は未だ眞理を知らざる者なり

或はニケヤ及びコンスタンチノポリに於て議定したる信經に記するが如く『聖神父より出づる者』と云へる教典を遵守する者と、之を毀損し約翰福音經十五章の廿六節に明言せる主基督の遺詔に乖きて『及び子よりも』と云へる語を追加したる者とを同一視するを得べきか、又は教會の諸機密及び聖使徒より連綿として繼續せる神品聖職を認むるものと、總て是等を認めざる者とを同一視するを得べきか、又基督を以て獨一なる教會の首となすものと羅馬のパーパをも并せて教會の首となすものとを同一視するを得べきか、總て是等を同一視するは理の許さゞる所にして必ず二者の中一は是にして一は非ならざる可らざるなり。

次に予は諸教派中に於て眞正なる基督教を發見するを得ずと言へども之を發見せんには最も簡易にして且つ最も明確なる標準の有りて存するなり。請ふ左に此を予に示さん。

夫れ眞正なる基督教會とは連綿として聖使徒等の遺業を襲ぎ、聖使徒等の傳ふる所及び七公會の議定したる所の教典を純正に保守するの教會是なり。而て此の如き教會のみ獨り『使徒と諸預言者との基に建てられたり、イエスハリストスは自ら其隅石なり』(以弗所書二章二十節)又此の如き教會のみ獨り『眞實の柱及固』(提摩太前書三章十五節)にして主耶穌より『地獄の門は之に勝たざらん』(馬太十六章十八節)との約を與へられしものなり。

基督教會の初代即ち初世紀より八世紀迄の間は教會に分派も生せずして至りて和合一致せり。然るに此一致和合は

終に羅馬のパーパに依りて破壞せられたり。彼の羅馬のパーパは世權を掌握するに至りしより傲然自ら稱して敎會の首となし、獨斷擅行以て敎會の制定を攪亂し、種々の妄誕を眞敎中に挿入したり。是れぞ敎會が分離を生ずるの一大原因となりしものなりき。去れば余は西敎會即ち羅馬敎會の妄を辨ずると共に東敎會即ち希臘敎會の眞實無妄なる所以を今條を逐ひて左に之を列擧せんとす。

第一に東敎會は主耶蘇基督及び使徒等の遺業を連綿として世襲するものなり。

第二に東敎會は聖使徒等より傳はりたる所のもの及び全地公會の議定したる所のものを純正に保有し、啻に敎義上に於るのみならず亦儀典上及び敎會制度上に於ても一點

の變更を爲さゞるなり。

第三に東敎會は聖書を解釋するには專ら初代敎會の聖師父等の解釋に從ひ、且つ全地公會が議定したる聖傳聖誡を固守するものなり。

第四に東敎會は主耶蘇基督を以て獨一なる敎會の首となし、其牧者輩は全く世俗を脫して專ら信徒を牧するを務め、國政に對しては基督及び門徒の命ずる所を守りて能く國權に服從するものなり。

第五に東敎會は全地敎會の制定に循ひて七件機密を執行し、又依然として初代の神品聖職を保存するものなり。

第六に東敎會は全地公會の制定に循ひて至聖童貞女マリヤを神の母として之を敬拜し、及び吾人の代求者として之

カフムウン曰く不眞理は早晩倒るべし唯眞理は永く存せん

に祈禱す。又神使等諸聖人等を敬拜し、及び吾人の代求者として之に祈禱するものなり。

以上擧示する所の條欵は東教會の實に唯一聖公使徒の教會なるを明證する記號の大略にして、若し尙一層東教會の眞理を知らんと欲せば宜しく東教會の定理書に就きて之を研究すべし。終に臨みて余は英國ラウトン大學の總長ユ、アリス氏が一千八百四十六年に於て東教會の正確なるを證せし言を引かんとす、彼れ曰く『使徒後任の系統と基督教の純潔とは東教會の內に存せられ、東教會は羅馬教會に服せざりしが故に聖職獻祭繫釋の權は連綿不斷依然として今日に至るまで保存せらるゝを得たり。又東教會は未だ曾て宗教改革なる者に遭遇せざるにより諄乎たる基督教の龜鑑を示すものなり云々』。又結尾に於て附言して曰く『故に救拯と平安とは東教會の教を保有するにあり』と。

○第十七

フ、ルファッフ曰く奇蹟を排斥する者は神證物主の存在を排斥するものなり

詰難　余は奇蹟を信ぜざる者なり。

辨駁　教會が確證する所の眞實の奇蹟を信ぜざる者は禍なり。彼等は縱令如何程其心の不信なるも實際行はれ將來にも亦行はれんとする奇蹟を斥くる能はざるなり。殊に怪むべきは彼等は世俗の歷史に信を措くものなるにも拘らず獨り教會が證明したる歷史に對して信を措かざることなり。勿論現時に於ては基督教の初世紀時代に於けるが如く奇蹟の現はるゝこと頻繁ならずして最も稀に顯はるゝなり。蓋初世代に於ては全世界をして眞神の教に歸せしめ

萬民をして眞神を信ぜしむるが爲には大に奇蹟を要したり、即ち感觸し易き異邦人と剛愎なる猶太人とをして耶蘇の神たること彼れの敎の眞理なること及び神が親しく使徒等を傳道に遣したることを信ぜしむるが爲めには必ず大休徵を要したり。而して我等は固より彼の時代の奇蹟を目擊したる者には非ずと雖ども基督敎の全地に普及せらるゝを見、又イエルサリムの破壞、猶太人の離散、基督敎の迫害、及び敎會の凱旋等の事蹟を目擊して耶蘇が曾て預言せしことの今實に應じたる奇蹟に驚かざる可らず。

此の如く奇蹟は吾人が信ぜざらんとするも能はざるの事實にして、唯吾人が注意すべきは妄信に由りて奇蹟を信ずることなく、宜しく敎會が認定したる奇蹟を信ずべきこと

金口イオアン曰く奇蹟は萬有の法則を破るものなり然れども之を行ふ者は萬有の法則内に在る者に非ずして萬有の法則を立てたる神造物主なり

なり、彼の眞實なる奇蹟を信ぜざる者は其實却りて最も妄信なる者なり、故に眞實なる基督敎徒たらんと欲せば堅く眞理を信ずると共に最も警戒して不眞理を避くべきなり。

耶蘇曰く「蓋僞パリストス及び僞預言者起りて大なる奇徵と奇蹟とを施し、若し能すべくば選ばれたる者をも惑はすに至らん」と、（馬太廿四章廿四節）去れば眞正の奇蹟と虛妄なる奇蹟とは決して相混同すべきものに非ずして、此二者の性質を區別せんと欲せば最も明晰なる標準の存するあり、即ち眞正の奇蹟は常に神の光榮を顯はし又人々の利益を致すものなれども、虛妄なる奇蹟に至りては常に人々を損害し及び聖書の主意に違反する結果を生ずるものなり、故に眞の基督敎徒は斯る性質を有する虛妄なる奇蹟には決して惑はさ

ヒラレト曰く祈禱とは神の恩寵を受けんとして出したる手なり

ウオリンのデミトリイ曰く祈禱は神の仁慈を納めたる寶藏を開く鍵なり

るゝの虞なきなり。總て奇蹟の眞僞疑はしき場合に於て我等の爲に最も信憑すべき依賴者は唯教會の證明なり。

○第十八

詰難　神は吾人の衷情をも洞察するものなれば我等は神に對して祈禱するの必要なし。

辨駁　然り子の言の如く神は實に吾人の衷情をも洞察するものなり。去れど神は吾人の心情を洞察するが故に吾人は神に對して祈禱せざるも可なりと云ふを得ず。無論神に於ては吾人の祈禱を要せざるなり、又吾人の讃榮は毫も神の不變なる盛德を補益するものに非ず。然るに之にも拘らずして神は吾人に祈禱讃美感謝を命ぜられたり。蓋し我等は神の造物なるを以て必ず神に祈禱し、神を讃美し、及び神に感謝すべき理に於て當然のことゝ云ふべし。況や吾人が神に祈禱するは其希望する所のものを神に知らしむるが爲に非ずして我等己の無力なるを感じて神の全能なる扶助を仰ぐが爲めなるに於てをや。故に我等が祈禱するは神の爲に祈禱するに非ずして我等自身の爲にするものなり。又我等は本と神に造成せられ常に神の加護を受け神より仁愛を被むる者なれば宜しく其造成者たり加護者たり及び仁愛者たる神に祈禱し、之を讃美し、之に感謝すべきは當然の本分なり。

アウゲスチン曰く吾等は祈禱に於て神と談話し神は聖書に於て吾等と談話す

祈禱は吾人の業事中最も高尚なる及び最も善美なるものにして總て吾人の業事は此祈禱に由りて尊貴なる價値を得、及び善美なる性質を得るに至るなり。夫れ祈禱なるもの

は人の思想をして至上なる神に向はしめ人の心情をして大慈大能なる神に結合せしむるものなり。又祈禱なるものは愛子が慈父に於けるの談話なり、罪人が救贖者に於けるの感謝なり、無力多罪なる者が仁愛無量なる神に於けるの籲呼なり、又祈禱は吾人の苦惱艱難を慰撫し又吾人に眞福を賜ふものなり、故に救主も殊に警醒祈禱することを吾人に命ぜられたり。

此の如く祈禱は吾人が聖行の基礎なれば我等宜しく口を以てのみ祈禱せずして衷情より神に祈り、目醒れば祈り、寢るに祈り、悲しき場合に祈り、危き場合に祈り、惑ひし時に祈り、罪に陷りし時に祈り、又祈禱を以て業を始め、祈禱を以て業を終るべし。蓋し祈禱を以て爲すの業事は神の前に大な

ヒラレト曰く祈禱は諸行爲に先つべきものなり蓋祈禱なくしては一の善事をも行ふを得ず

る價値を有するものなれば、なり。去れば子若し勉めて祈禱せば其身常に潔淨にして罪に汚さるゝことなかるべし、何となれば祈禱は子に諸善を教へ及び子に眞正の安心を與ふればなり。

○第十九

詰難　神は人に惡を行ふを聽して終に之を地獄の永苦に定むるものたらば甚だ殘忍と云ふべきなり。

辨駁　否神は人を定罪するに非ず、即ち人は自ら己を定罪するなり。神は萬善の本源にして子が若し善たらば子の爲に創世より以來備へられたる國を嗣がしむる者なり。（馬太廿五章三十四節）故に神は罪惡の原因者にも非ず、亦地獄の原因者にも非ざるなり。即ち地獄は人の罪惡が惹起せし結果にして萬

金口イオアン曰く基督に在て生存する者は眞に自由なる者なり蓋自ら罪を嫌まざれば他人に亦己に罪を加へさらん

ハウレイ曰く人は自由なる者と雖より造られしが故に不潔なる慾欲の奴となることなれ

惡の祖なる魔鬼及び其門下の者の爲にのみ備へらるゝ所のものなり。

子は云ふ神は何故に惡を行ふを吾人に聽せしかと。余は之に答へて云はん神は吾人の靈魂に理性を賦し、又人を己の像と肖とに依りて造り、且つ人に善惡を選擇取捨するの自由を賦與し給へり。而して神が吾人に此自由を賦與し給へるは神の吾人に於ける最と深き愛の顯はれたるものにして、吾人若し此自由を惡用せば其罪は吾人に在りて神の罪に非ざるなり。譬へば今余が子に生命保護の爲めに一の武器を與へたりと假定せんか、去らば余は子に對して最も厚き恩愛を顯はしたるものなり。然るに子若し余が意に悖り其武器を以て自ら己の身を傷けたりとせば其傷痍の原因

は果して誰に存すべきか、無論其原因は子自らに存して余に存せざること明かなり。神が吾人に對して行ふ所も亦之と異ならず、神は吾人に善惡を選擇取捨するの自由を與へ、又種々の方法を盡して吾人に善を選ばしめ、又吾人に種々の仁愛を施して善道を踐むに易からしめ、又吾人の欲するに隨ひて無量の恩惠を賜はんとしつゝあるなり。然れども神は決して人を强迫して善を行はしむる者に非ず、何となれば神若し人を强迫して善を行はしむれば是れ即ち人類に賦與したる自由を損害するものなればなり。故に人の定罪を受くるは神之が原因者たるに非ずして人自ら己を定罪するなり。神は唯各人に自由にして生と死と天國と地獄とを選ばしむるに止まるのみ。

トルマチエフ曰く眞正の自由は神誡の範圍内に在り至上なる自由は神意に從順するに在り

凡そ人の自由にして踐まんとする道に二線路あり、一は善道にして一は惡道なり、惡道を踐む者は善道を踐む者に比すれば甚だ愉快なるが如く見ゆる場合あり、去れど其到達する處は衆苦を充滿するの地獄なり、善道を履む者は惡道を履む者に比すれば最も苦辛なる場合あり、去れど其到達する處は萬福を充滿するの天堂なり、而して子は若し惡道を履む者たらば將に達せんとする地獄の存在を決して疑ふこと勿れ、蓋福音書中には救主耶蘇は處々に地獄の存在を明言せられたり、又地獄の存在は萬國萬民が萬世固信じて毫も疑を措かざる眞理なり、故に人誰か地獄は存在せざるものなりと說かば是唯神の審判を懼れ良心に背きて言ふに過ぎず、決して本心より之を唱ふるに非ざるなり、若し

吾人は己の罪業を算へ、又己が罪の大なるを知り、且つ神が種々の方法を用ひて吾人を善に導くを知らば地獄の存在すべき理も必ず了解せらるゝに至るべし、

○第二十

詰難　余は宗教を奉ずるが爲に世人の嘲笑を被むるを欲せざるなり、

辨駁　子は世人の嘲笑を斯くまでに恐るゝ者なるや、子は己を救濟するが如き大事業の爲に世人の嘲笑を凌ぐの勇氣を有せざるか、噫惜むべし、子知らずや凡そ不羈獨立の精神なくんば一の善事をも行ふと能はざるを、且つ子を嘲笑する者の如きは子が平素彈劾して措かざる不道德者流に過ぎざるに非ずや、然るに子は此輩の甘心を得んが爲に貴

シリヤのエフレム曰く我が眞心の指揮に循て人の毀譽褒貶を顧みざる者は是れ眞に俊傑の士なり

哲學者グリゴリイ曰く言語業操にして品行淸正なる者

は他の其朋友なして己に仇敵たらしむ

重なる靈魂を亡さんと欲するか。子若し此輩より稱讃を被むらば反りて子の爲に大恥辱なり、若し此輩より嘲笑を受けなば是れ子が爲に大名譽なり、何となれば子が彼輩より嘲笑を被むるは是れ既に子が彼輩と均しからざるの明證なればなり。況や眞正の宗教を奉じて善道を履む者は獨り子のみに非ざるに於てをや。固より世上には不道德者流多し、去れど德行者の數も亦決して僅小に非ざるなり。故に縱令一方には不道德者流ありて子を嘲笑するも他の一方には德行者ありて子に滿足なる慰撫を與ふべし、又彼の不道德者流と雖ども若し子が剛毅不撓にして其精神を變ぜざるを見れば必ず其精神に感じて終には子を尊敬するに至るべく、之に反し世の毀譽褒貶に由て徒に其精神を挫きし者

ヒラレト曰く基督と侮辱を共にするはり榮なるはなし

罵詈讒謗は之に抵抗する者なきときは敗死す

神學者グリゴリイ曰く賢者の思慮動作は悉く不肖者の企望主眼の反對に出るを以て不肖者は賢者を見て以て愚者となす

は尙益世の嘲笑を被むるに至るべし。去れば子は常に溫和寬大にして世人の嘲笑に由りて其心を亂さず。世人の嘲笑輕侮は彼等の爲すに任せ、唯己は專ら衆辱を忍び賜へる救主基督の龜鑑に倣ふべきなり。

夫れ姦惡の世に在りては人多くは邪惡沈淪の道に迷ふが故に適眞理生命の道を履む者に逢ふ時は之を奇として嘲笑侮辱するは自然の勢なり。故に此の如き輩の嘲笑侮辱は宜しく甘じて之を忍ぶべし。蓋是れ子が永久の救贖を得るの確乎たる明證を示すものなればなり。主耶蘇基督は之を吾人に語て曰く「窄き門より入れ蓋沈淪に導く門は濶く其路は寬くして之に入る者多し、唯生命に導く門は窄く其路は細くして之を得る者少し」（馬太七章十三節至十四節）又曰く「此姦惡の世

金口イオアン曰く若し其心己を責せば豪世己を誹るも之を恐るゝこと勿れ

トルマチエフ曰く基督教徒の名義のみを戴くと實際基督教徒たるとは同一に非ず

に於て我及び我の言を恥ぢん者は人の子も其父の光榮を以て聖なる天使等と偕に來らん時彼を恥ぢんとす。（馬可八章三八節）故に子は宜しく世人の毀譽褒貶に惑りて其心を亂すことなかれ、又世人の嘲笑罵詈によりて其心を痛むる勿れ、反りて世人の嘲笑を被るは子の責任なりと覺悟すべし。

○第廿一

詰難　余は屢、視る基督教を奉ずる者の品行は反りて普通人の品行に比して劣れるあるを、辨駁然れども是れ或は其者が眞實斯教に熱心なるに非ずして唯外面のみ斯教を遵奉するに因れるなり、或は其者の稟性至りて頑にして未だ周到なる基督教の感化を受けざるに因れるなり、又は之に反し其者實に廉潔なるも子が之を偏視したるに因れるなり。

ソコロフ曰く名義上の基督教徒は多し然れども眞正の基督教徒は少なし

且つ夫れ基督教徒と雖ども同じく人たるなり、既に人たる以上は其性固より不完全にして生來の罪惡を斷然蟬脫ずることは到底能はざる所なり、去れば彼等の品行も時としては基督教の誡命及び自己の希望に違反することあるも必竟免れざるの勢と云ふべし、又一方より論ずれば基督教が假令盡く人性の不完全を消滅し生來の罪惡を斷然蟬脫せしむることを能はずとするも、吾人は此教の感化力に由りて漸々罪惡の度を減じ、終には之を全滅せしむるを得るは爭ふべからざる事實なり、蓋基督教は啻に善を吾人に命ずるのみならず、又吾人をして啻に通常の善人たらしむるのみならず、吾人をして達し得る限り完全なる者たらしむる

平易有力なる方法を與ふるものなり。故に人若し熱心に眞實に此方法を用ひなば忽ち其美質を恢復して始は先づ善良なる者となり、後ち終に至善なる者の域に達するを得るなり。何となれば基督教の固有なる性質は吾人をして完全なる者となすに在ればなり。去れば人誰か基督教徒となりて猶己の品行を保つことを能はずとせば、若し基督教徒とならざるに於ては其不品行の狀態實に計られざるべし。

◎第廿三

詰難　凡そ宗教を奉ずる者の生活より不愉快なる生活は非ず。何となれば若し宗教の命ずる所に從はゞ全身全財を擲ち小心翼々として諸般の事物に接せざる可からず、斯る生活は現社會に生を營む者の決して遵守する能はざる所

アザソン曰く宗教上の希望は實に困難の下に屈縮せざるのみならず却て困難中に慰樂を生ず

なり。

辨駁　否々子よ默すべし子は餘りに事實を過大にする者なり。夫れ基督教の誡命は吾人の爲に最も苦しき軛なるには相違なし、然れども我等の主耶蘇基督は此軛を吾人に負はしむると同時に復吾人に語て曰く「蓋我が軛は易く我が任は輕し」と。（馬太十一章三十節）此の如く基督教徒の生活は一方より之を觀察すれば甚だ鬱々たる生活の如しと雖ども、他の一方より之を觀察すれば甚だ欣々たる生活の行路を歩むものなり。子は偶、熱心なる基督教徒等の生活を見しこともあらん、而して彼等は子が言ふが如く果して不愉快なる境遇に苦み居りしか、否反りて彼等は最も平安なる最も滿足なる生活を營むものなることを知りしならん。

セチカ曰く眼睛は能義を顯はすべき好機會なり

夫れ情慾に抗して純潔なる行を脩むるは固より困難なる事業には相違なきなり。然れども勞苦勤勉を要するは啻に宗教上のことにのみ限れるにあらず、總て此世に在りては縱令何事を爲さんとするにも必ず多少の勞苦を要せずして成し得べき者はあらざるなり。子は試に思へ先づ自己の地位を高め家產を起すには毫も勞苦勤勉せずして之を爲し得べしとなすか。否縱令一の遊戲を爲さんとするも幾分の勞苦を要するなり。況や永遠福樂なる救贖を得んが爲に拱手安坐して之を得んとするは豈に無理なる要求に非ずや。世人動もすれば基督教徒が祈禱懺悔を務め、貧者を惠み、世俗の害毒なる遊興を避くるが故に之を目して嚴格に失したる不愉快の生活を營む者となす。然れども是れ唯外觀よ

エルヲストナリイ曰く幸福は義務を盡すより發射し來るの光なり

金口イオアン曰く來世の愉快を求めよ然らば現世の愉快をも獲らるべし

りするの臆測に過ぎず、若し內部に立入りて近く之を觀察すれば反りて彼等の心情は常に平安宏量にして世人が不愉快となす所のものも彼等は反りて之を愉快となすなり。蓋愛して行ふ者の爲には更に苦を感ずることなく最も不愉快なることも反りて愉快なるものと變ぜしむるを得べし。子若し之を疑はば自ら經驗して此言の非ならざるを知るべし。凡そ之を經驗せざる者には言語を以て此理を通ずること能はざるなり。故に子よ易く且つ輕き基督教の軛を負ひ、現世に於ては心の平安和樂を得、來世に於ては限りなき永遠の福樂を得るを慮るべし。而して此福樂を得んとするは素より大なる勞苦を要する事業なること勿論なりと雖ども、唯其初行に於て苦を感ずるのみにして、吾人若し己

リン子曰く善き習慣を形づくらんと勉で心を用ゆる習慣こそ最も明智なる習慣なるべけれ

に神を愛するの熱情を有せば此至難なる天道の行程も極めて平坦なるものと變ずべし。

第廿三

詰難　人青年の時期には須らく快樂を盡すべし。

辨駁　去りながら子が快樂を盡すべしと唱ふるは徒に青年の時期を放肆遊惰にして送らんとするには非ざるか。或は無賴漢と交を結びて己の名譽健全を毀損し、神及び良心の禁ずる所のことを行はんとするには非ざるか。故に子が言ふ所の如きは恰も後來罪惡なきを欲して預め罪惡を滿さんと欲するに等しくして罪惡の害毒と惡習の危險とを忘失したる言と云ふべきなり。勿論青年の時期は多く快樂に傾き易きものなり、然れども此快樂滿足は宜しく無邪氣

フランクリン曰く予は唯品行直實なるを以て吾が國民に重ぜられたり

アロ、エログリイ曰く老年の榮は老年前の勢を證するものなり

潔白なるものならざる可からず。何となれば青年の時期は全生涯の首途なり、故に務めて惡を避け善を樂み其本分を瑕瑾なく行ふの習慣を養成せざる可からず。且つ青年の時期は老年の時期と異なりて其氣力精神至りて活潑なれば善を行ふに當りても亦同じく剛毅活潑を要するなり。凡そ世に無邪氣潔白なる青年ほど好ましきものなく溫和恭敬なる青年ほど美しきものはなきなり。蓋青年の時期は恰も人の全生涯の運命を寫したる明鏡の如きものにして、人は此青年の時期を誤ると誤まらざるとに由りて或は神に喜ばれ、或は世の尊敬を被むる者となり、或は神に棄てられ、或は世の擯斥を受くる者となるなり。

○第廿四

ソロモン曰く明日あるを以て誇稱すなかれ蓋し明日何事か生ずるや爾之を知らざればなり

詰難　余は老年に達し既に世俗の業務を辭したる時に至りて宗教を奉ずべし。

辨駁　併し子は果して己が老年に達するまで其生命を維持し得べしと保證するを得るや。子若し確に之を保證するを得ば子が云ふ所の言も或は不可なかるべし。然れども人生は朝露の如し、固より明日を期する能はざるなり。世上には多く子に類する者ありて漫りに明日明日と唱ふれども、其賴む所の明日は反りて彼等に審判と永苦の日とを來すものなるを知らざるなり。

手或は云はん、人は死期に臨みて懺悔するも晩からざるべしと。然れども死期に臨みて子が懺悔するの便宜を有すべしとは何人も之を保證するを得ざるなり。

金口イオアンの母アンフーサ曰く少年は老年の期を待つ然れども老年の者は死亡の外更に待つべきものなし

又子は曰く神は極めて仁慈なるが故に人若し痛悔せば如何なる不當の罪人と雖ども其罪を赦さるべしと。然れども主神は縱令痛悔したる罪人に赦罪を約せしことあるも決して彼等に明日ありとは約せしことあらず。反りて神は吾人が常に警醒して不意に襲ひ來らんとする死に備ふべきを命じたり。即ち主公義の審判者は吾人に語て曰く「故に儆醒せよ、爾等の主の何の時に來るを知らざればなり。……若し其惡しき僕心の中に我が主の來るは遲からんと曰ひて其同僚を打ち、酒徒と偕に食飲せば、乃俟たざる日知らざる時に其僕の主來りて彼を斷ち、彼を僞善者と同じき分に處せん。彼處に哀哭と切齒とあらん」と（馬太二十四章四十二節及四十八節至五十一節）去れば保證すべからざる明日を賴みて己の貴重なる運命を賭

せんとするは實に笑ふべきのことゝ云ふべし。夫れ死亡の期し難くして人生の果敢なき鑑は子が日毎に目擊する所に非ずや。然るに子は之を知りて猶明日有りとなすか。子は祈禱懺悔を務めず又己の汚穢なる罪惡を洗淨せずして而も大膽に枕を高くして安眠するを得るか。

○結談

余が以上子と談論したる所は正敎に對する最も重立たる詰難を辨駁したるものにして子は此外にも正敎に對する種々の詰難を聞くことあらん。然れども夫等の詰難は余が今まで辨駁し來りたるものと均しく毫も取るに足らざる詭辯なることを知るべし。而して子倘し萬一此の如き詰難に由りて心を亂すが如き場合あらば偏に主神の敎示を祈り、聖書を繙き及び敎會諸師父の敎書に就きて其惑を攘ふべし。併しそれにても尙其惑を攘ひ難き時は宜しく敎會の牧師に之を質して其惑を決すべし。噫子よ宗敎を度外視すること勿れ又冷淡なる心を抱きて宗敎に對すること勿れ。宜しく之を研究して其眞理なるを覺るべし。子若し其眞理なるを知らば隨ひて之を愛するならん、既に之を愛すれば其法戒を守るも亦至て容易なり。總て宗敎に反對する所のものは宗敎の眞理なるを知らずして單に之を曲論するに過ぎざるなり。

ヒラレト曰く信敎は國民の靈魂なり若し一國民中に此信敎衰滅せば其國民は死體と變ぜん

神學者ゲリゴリイ曰く神を思念するは呼吸するよりも必要なり

余は此談論が少くとも子に利益を與へんことを切望す。然れども子若し余が此辨駁を以て其心に不滿足なりと認めなば、是れ余が辨駁の不充分なりし罪に因るものにして、余

が辯護したる眞理其者の罪には非ざることを知るべし。抑、此の如き缺點の生じたるは一は余が子を倦ましめざらんことを務めたるに因り、又一は余が其思想を陳述するの不堪能なるに因れるなり。唯余は神に祈り神は余が此微勞に降福して子に多少の利益を與へ、子をして宗教に熱心ならしめ、善を愛して永遠の福樂を望むに至らしめんことを希ふのみ。

詰難辨駁 正教談畢

明治二十五年二月十五日印刷
明治二十五年二月十七日出版
明治三十四年九月廿八日再版印刷
明治三十四年十月二十五日發行

（正價金拾錢）

翻譯兼發行者　松本高太郎　東京府下豐多摩郡千駄ヶ谷村四十九番地
印刷者　中野鎌太郎　東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地
發行所　正教會事務所　東京市神田區東紅梅町六番地
發賣所　愛々社　東京市神田區北甲賀町十三番地
印刷所　帝國印刷株式會社　東京市京橋區築地三丁目十五番地

212

特 18
291

正教談

国立国会図書館

020879-000-6

特18-291

正教談（詰難辯駁）

コラブレフ／編

松本 高太郎／訳補

M34

ABI-0712